唐津城跡（11）

唐津市文化財調査報告書　第187集

2021・3

唐津市教育委員会

唐津市文化財調査報告書　第187集

唐津城跡（11）

― 唐津市役所建替えに伴う発掘調査 ―

２０２１．３

唐津市教育委員会

唐津市文化財調査報告書　第187集

唐 津 城 跡（11）

1　調査地全景①（調査前、西から）

2　調査地全景②（調査前、北西から）

巻頭図版 1

1　2区上層遺構全景（東南から）

2　2区下層遺構全景（北東から）

巻頭図版 2

1　1区北東隅近景（東から）

2　2区道路状遺構近景（北から）

1　蕨手三つ巴文軒丸瓦（127）

2　火打石集合（133 ～ 139）

巻頭図版 4

序　　文

佐賀県の西北部に位置する唐津市は、玄界灘を挟み朝鮮半島に面しているという立地条件から、古くから大陸との交流が盛んに行われ、大陸文化の受容口として、非常に重要な役割を担ってきました。このことは、唐津市に所在する遺跡、あるいはそこから出土した遺物から窺い知ることができます。

しかし、その一方で、現在開発行為等によって多くの遺跡が消滅の危機に瀕していることもまた事実です。唐津市教育委員会においても、以上のような状況から、やむをえず保存できない文化財については事前の発掘調査を行い、できるだけ正確な記録保存に努めると同時に、遺跡の保存・活用のための措置にも力を注いでいるところです。

本書は、唐津市役所の建替え工事に伴い、平成 30 年 5 月から 7 月にかけて実施した、唐津城跡三の丸の本調査の調査記録です。本書が、地域住民の皆様はもとより、市民各位の埋蔵文化財保護に対するご理解、さらには学術研究の分野においてもご活用いただければ幸いなことと存じます。

最後になりましたが、発掘調査から出土遺物の整理に至るまで、唐津保健福祉事務所並びに地元作業員の方々をはじめとする多くの人々のご理解とご協力に対しまして、心から感謝の意を表するものであります。

令和 3 年 3 月 31 日

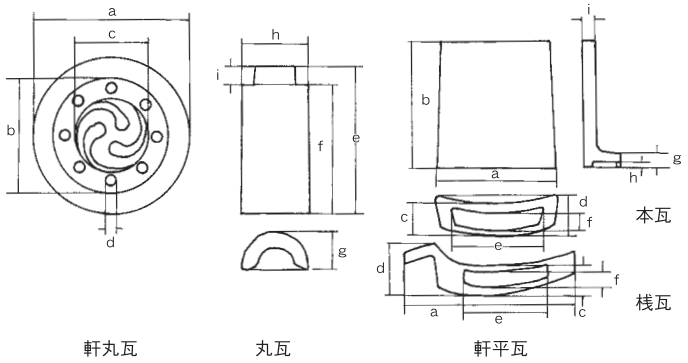
唐津市教育委員会　教育長　栗原　宣康

例　　言

1　本書は、唐津市教育委員会が唐津市役所新庁舎建設に伴い、平成 30 年 5 月から 7 月にかけて実施した唐津城跡三の丸の調査報告書である。
2　調査は佐賀県文化課文化財保護室の指導を受け、唐津市教育委員会がこれにあたった。
3　調査及び本報告書作成にあたっては、佐賀県文化課文化財保護室にご協力を賜った。
4　現地での発掘調査は築城昇平、美浦雄二が担当し、遺構等の実測（写真測量）は（株）とっぺんに委託して実施した。
5　現地での調査写真の撮影は築城、美浦が行い、空中写真の撮影は（株）とっぺんに委託して実施した。
6　遺物の実測、製図は井上美代子、大薗聖子、美浦が行った。
7　執筆・編集は美浦が担当した。
8　遺物の写真撮影は美浦が行った。
9　瓦・石製品の調査においては、中山圭氏（天草市観光文化部）、藤木聡氏（宮崎県教育委員会）より指導・助言を賜った。Fig.28、29の測量図は佐賀県立図書館データベースによった。

凡　　例

1　遺跡の名称は「唐津城跡」、略号は「KRJ-NJN」である。
2　Fig.３は唐津市発行の５万分の１図「唐津市全図」を使用した。
2　挿図における方位は座標北を表す。
3　遺構名は性格不明遺構「SX」、土坑「SK」、溝「SD」、小穴「P」とした。
4　遺構の高さは標高で表し、遺構の法量はm、遺物の法量は㎝単位である。
5　写真の縮尺は不統一である。
6　出土遺物及び図面等の資料は唐津市教育委員会が保管する。
7　瓦の計測位置は下記のとおりである。



目　　次

第Ⅰ章　調査の経過 …… 1
第１節　調査に至る経過 …… 1
第２節　調査の組織 …… 1
第３節　調査の経過 …… 1
第４節　調査日誌 …… 2

第Ⅱ章　環境 …… 5
第１節　地理的環境 …… 5
第２節　歴史的環境 …… 6
第３節　近世以降の唐津地域の歴史的展開 …… 7

第Ⅲ章　遺構 …… 13
第１節　調査の概要 …… 13
第２節　層序 …… 13
第３節　遺構 …… 13

第Ⅳ章　遺物 …… 21
第１節　陶磁器・土器 …… 21
第２節　土製品・瓦・石製品・金属製品等 …… 22

第Ⅴ章　まとめ …… 41
第１節　遺構について …… 41
第２節　遺物について …… 41

表　目　次

Tab.1　調査の経過表 …… 2
Tab.2　遺構一覧表 …… 38
Tab.3　遺物観察表（1） …… 38
Tab.4　遺物観察表（2） …… 39
Tab.5　遺物観察表（3） …… 40
Tab.6　遺物観察表（4） …… 40

挿　図　目　次

Fig.1　調査区位置図①（1/1,000）
Fig.2　調査区位置図②（1/1,000）
Fig.3　地形分類図
Fig.4　唐津市内主要遺跡位置図
Fig.5　調査区上層遺構配置図（1/200）
Fig.6　トレンチ土層図、基本土層模式図
Fig.7　礎石列、SE004
Fig.8　調査区下層遺構配置図（1/200）
Fig.9　調査区下層オルソ（1/200）
Fig.10　SD014・SX015（1/150）、礎石トレンチ２南壁土層
Fig.11　遺物実測図①（1/3）
Fig.12　遺物実測図②（1/3）
Fig.13　遺物実測図③（1/3）
Fig.14　遺物実測図④（1/3）
Fig.15　遺物実測図⑤（1/3）
Fig.16　遺物実測図⑥（1/4）
Fig.17　遺物実測図⑦（1/3）
Fig.18　遺物実測図⑧（1/3）
Fig.19　遺物実測図⑨（1/3）
Fig.20　遺物実測図⑩（1/3）
Fig.21　遺物実測図⑪（1/3）
Fig.22　遺物実測図⑫（1/3、1/4）
Fig.23　遺物実測図⑬（1/4、1/3）
Fig.24　遺物実測図⑭（1/1、1/3）
Fig.25　遺物実測図⑮（1/3、1/2）
Fig.26　唐津小学校全図掛軸
Fig.27　校舎と市役所平面図及び調査区合成図
Fig.28　唐津城下絵図と明治14年測量図
Fig.29　唐津城下絵図と明治14年測量図及び調査区合成図

巻頭図版目次

巻頭図版１
　１　調査地全景①（調査前、西から）
　２　調査地全景②（調査前、北西から）
巻頭図版２
　１　２区上層遺構全景（東南から）
　２　２区下層遺構全景（北東から）
裏表紙　土製人形（109）
巻頭図版３
　１　１区北東隅近景（東から）
　２　２区道路状遺構近景（北から）
巻頭図版４
　１　蕨手三つ巴文軒丸瓦（127）
　２　火打石集合（133～139）

図　版　目　次

ＰＬ－１
　1　航空写真　市役所から西を望む
　2　航空写真　市役所から北を望む
ＰＬ－２
　1　調査区全景（調査前）
　2　1区遺構検出状況（南東から）
　3　1区全景（西から）
　4　1区西半（北から）
　5　1区北東隅近景①（北から）
　6　1区北東隅近景②（南から）
　7　SE004完掘状況（北から）
　8　SE005遺物出土状況（南から）
ＰＬ－３
　1　SK002半裁（南から）
　2　SK003遺物出土状況（北から）
　3　SK007遺物出土状況（北から）
　4　SX008遺物出土状況（南から）
　5　カク乱8半裁（南から）
　6　カク乱1南壁土層（北から）
　7　サブトレンチ2全景（北東から）
　8　2区上層遺構全景（北東から）
ＰＬ－４
　1　2区下層全景①（東から）
　2　2区下層全景②（南東から）
　3　礎石トレンチ3①（西から）
　4　礎石トレンチ3②（西から）
　5　SK012遺物出土状況（北から）
　6　カク乱9検出状況（北から）
　7　2区調査区東壁土層（西から）
　8　2区調査区南壁土層（北西から）
ＰＬ－５
　1　SD014・SX015近景①（北から）
　2　SD014・SX015近景②（南から）
ＰＬ－６
　1　SX013付近西壁土層（東から）
　2　SD014石列検出状況（南東から）
　3　SD014完掘状況（北から）
　4　SD014近景①（南東から）
　5　SD014近景②（西から）
　6　SD014近景③（北から）
　7　SX015土層（北東から）
　8　3区検出状況（南から）
ＰＬ－７
　1　遺物（1～14）
　2　遺物（15～20）
　3　遺物（21）
　4　遺物（22、24）
　5　遺物（23）
　6　遺物（25～27）
　7　遺物（28）
　8　遺物（29）
　9　遺物（30）

ＰＬ－８

1 遺物（32）

2 遺物（33）

3 遺物（36、37、39）

4 遺物（38）

5 遺物（40～42）

6 遺物（42）

7 遺物（43～48）

8 遺物（49～56）

9 遺物（57～65）

ＰＬ－９

1 遺物（66～70）

2 遺物（71）

3 遺物（72～79）

4 遺物（80～93）

5 遺物（94～100）

6 遺物（101～105、108）

7 遺物（106、107）

8 遺物（109）

9 遺物（110～114）

ＰＬ－10

1 遺物（121）

2 遺物（130）

3 遺物（131、132）

4 遺物（139①）

5 遺物（139②）

6 遺物（139③）

7 遺物（139④）

8 遺物（139⑤）

9 遺物（140）

ＰＬ－11

1 遺物（141、142）

2 遺物（143）

3 遺物（144～156）

4 遺物（176、177）

5 遺物（178～181）

6 遺物（144）

7 遺物（182～185）

ＰＬ－12

1 遺物（122、123）

2 遺物（124～126）

3 遺物（128）

4 遺物（129）

5 遺物（144～147）

6 遺物（148～156）

7 遺物（157～163）

8 遺物（164～175）

第Ⅰ章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

平成28年度に唐津市総務部総務課（以下総務課）より市役所敷地内の文化財の有無について問い合わせがあり、市役所敷地は周知の埋蔵文化財包蔵地「唐津城跡」に含まれているため、開発を行う場合は文化財保護法に基づく通知が必要であることを伝えた。その後複数回に及ぶ協議により、総務課では市役所新庁舎の建設を予定しているため、市役所敷地内に遺跡が残存しているか確認してほしいという要望があった。そこで唐津市教育委員会では、市役所敷地内について平成28・29年度に、文化財の有無を確認する試掘調査を実施した。その結果、両年度の調査において、建物の礎石と思われる石材や近世陶磁器が出土したため、総務課に敷地内に遺跡が残存していることを伝え、開発を行う際にはさらなる協議が必要であることを伝えた。その後、平成29年度に市役所新庁舎の建て位置と工法が決まったことから、遺跡の保存についての協議を行ったが、現地での保存が難しいことから、平成30年度に本調査を実施した。整理作業は令和2年度に実施した。

第２節　調査の組織

調査組織は次のとおりである。

調査団長	教育長	栗原宣康
事務局	教育部長	保利守男（平成30年度）、草場忠治（令和２年度）
	教育副部長	中尾修二（平成30年度）、櫻井実規子（令和２年度）
	生涯学習 文化財課長	中尾修二（平成30年度）、田中和稔（令和２年度）
	文化財調査係長	仁田坂聡（平成30年度）、草場誠司（令和２年度）、美浦雄二（令和２年度）
	文化財調査係	美浦雄二（平成30年度）、坂井清春、立谷聡明、鮎川和樹、築城昇平、井本吏沙
	発掘作業員	小副川初美、志氣勝、谷口陽一、戸田正一、野﨑元則、東島強、藤原和幸、堀川尚美、宮口眞由美、盛永和恵、山口直茂
	文化財整理員	井上美代子、大薗聖子、宮﨑良子、山中比沙惠

第３節　調査の経過（Tab. 1）

市役所新庁舎の建て位置は市役所敷地内の西半となったが、この位置は平成29年度に試掘調査を行った場所であり、このうち１トレンチで遺跡の残存が確認されていたため、１トレンチ周辺について本調査を実施することとなった。来客も多いため、調査用地を広くとることができず、分割して調査を行うこととなった。

確認調査では、舗装直下で建物礎石が確認されていたため、舗装部分より下層の表土剥ぎは慎重に行った。表土剥ぎの結果、１区とした調査区北半には礎石はなく、カク乱や土坑及び浅い直線的な溝等が確認された。１区の調査終了後、２区、３区とした調査区南半の調査に取り掛かった。２区は平成29年度

の１トレンチを含むことから礎石の存在が予想されたため、慎重に表土剥ぎを行った。その結果礎石列を確認した。石列は抜けが多いものの、２区のほぼ全面に広がっていることが分かった。礎石列は絵図との比較から、旧唐津小学校の礎石の可能性が高いことが分かった。この他２区では、貼床状に硬化した粘土の面が確認されていたため、その確認も行った。貼床状の粘土面は、確認調査では建物の土間と考えていたが、幅が３～４ｍで帯状に続いており、唐津城下の絵図と調査位置との照合により、この場所が屋敷間を通る道路である可能性が高いことが分かった。硬化面の脇では溝も見つかった。１区で見つかっていた直線的な溝跡も側溝であることが配置により分かった。３区は表土剥ぎの結果、カク乱が激しく、遺構は残存していないことが分かった。

発掘調査は条件面が厳しかったこともあり、遺構面１面の調査は行えたが、その下層の調査が行えなかった。図化作業も含め調査には不備が多いことは否めない。

	平成29年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
準備												―

	平成30年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
準備	―											
1区調査		―	―									
2区調査			―	―								
3区調査			―									

	令和２年度											
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
遺物実測		―	―	―	―	―	―	―	―			
報告書作成					―	―	―	―	―	―	―	
報告書印刷											―	―

Tab.１　調査の経過表

第４節　調査日誌

平成30年

５月25日　　ドローン写真撮影
５月28日　　表土剥ぎ開始
５月31日　　遺構検出開始
６月８日　　遺構掘削開始
６月15日　　１区写真撮影、３次元計測
６月18日　　２区遺構検出開始、１区埋戻し
６月20日　　３区表土剥ぎ
６月27日　　２・３区３次元計測
７月４日　　道路遺構（ＳＸ015）検出
７月13日　　２区写真撮影・３次元計測
７月18日　　深掘り調査・埋戻し
７月19日　　撤収完了

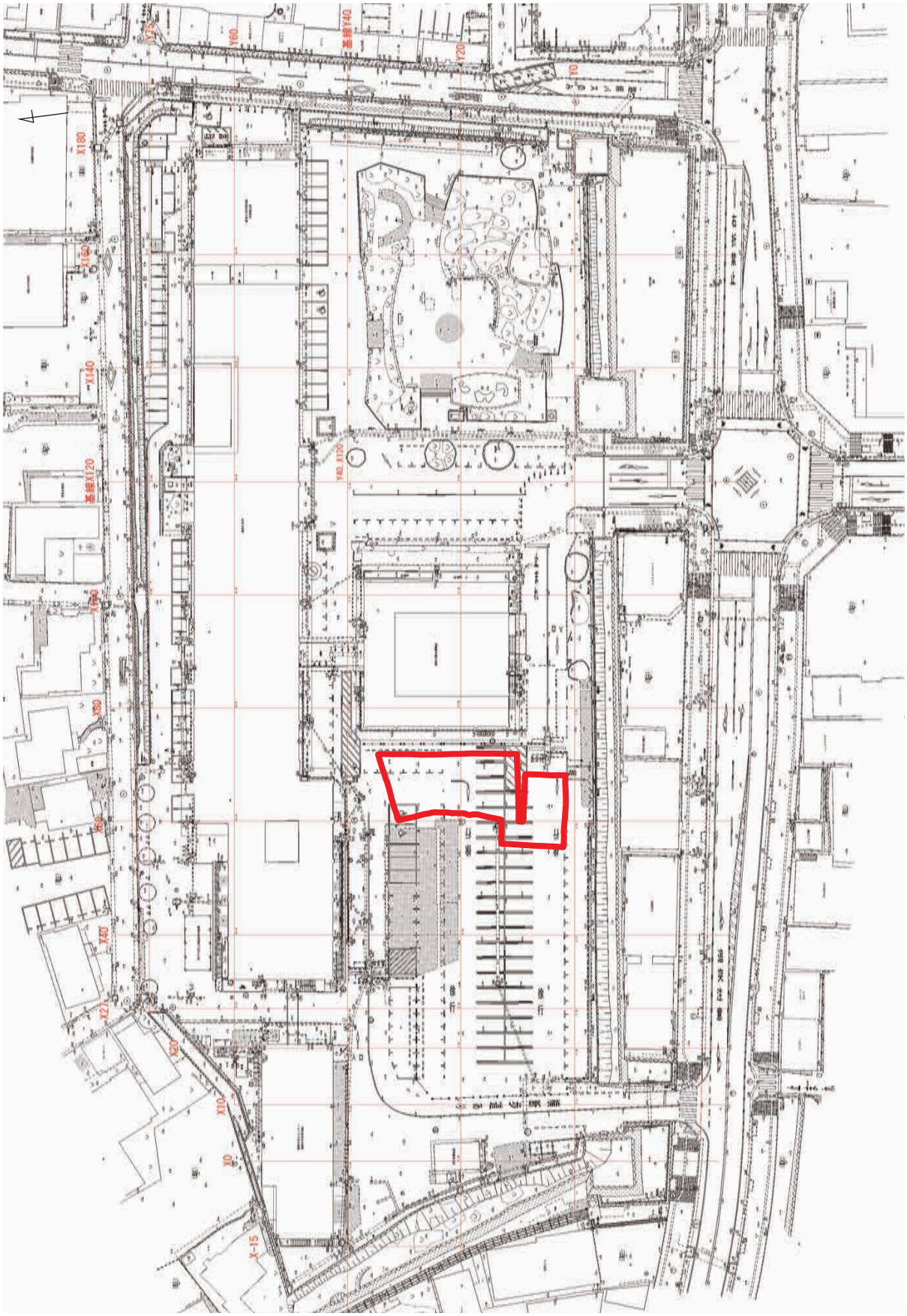


Fig. 1　調査区位置図①（1/1,000）

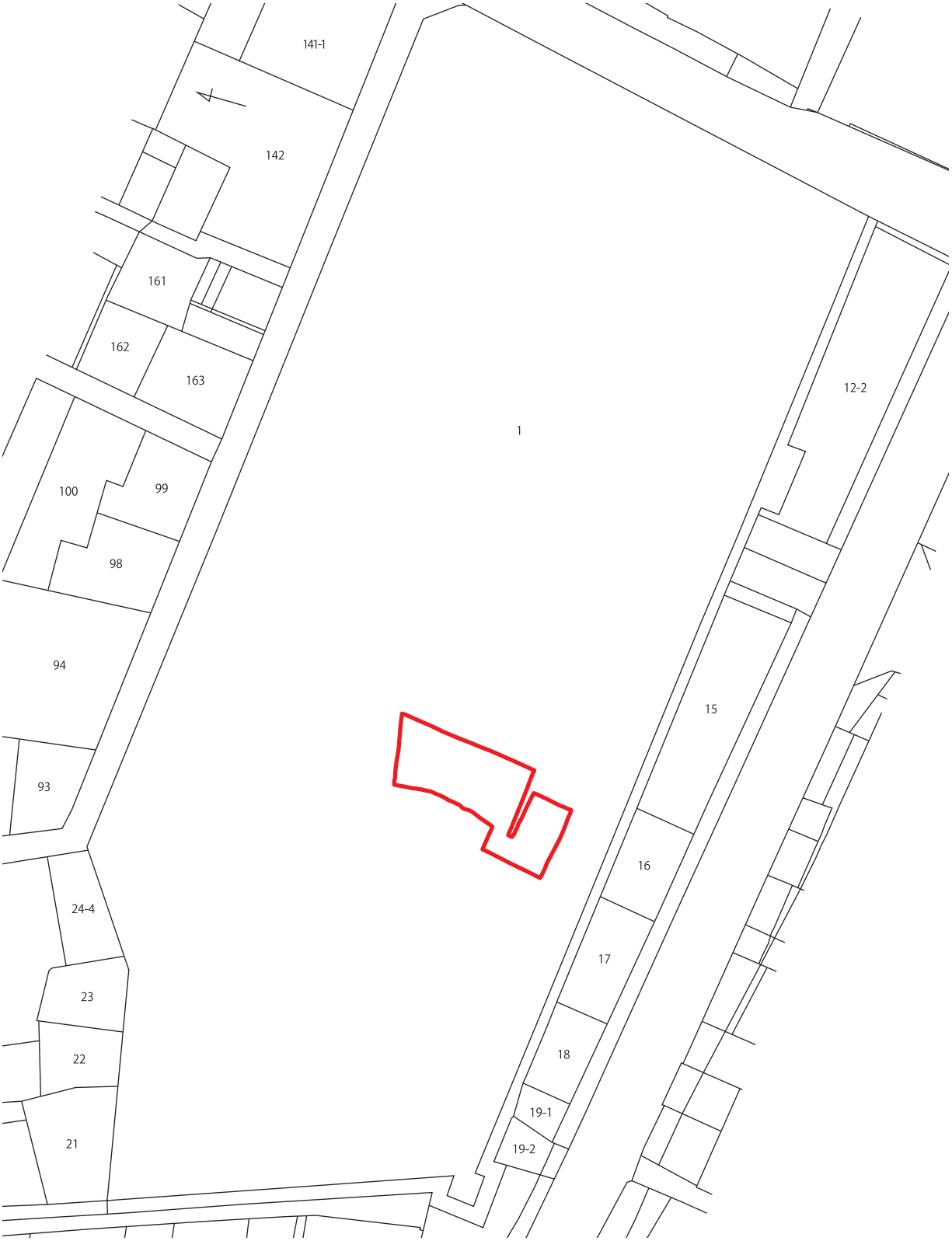


Fig. 2　調査区位置図②（1/1,000）

第Ⅱ章　環　境

第１節　地理的環境（Fig. 3）

（1）唐津市域の地理的環境

唐津市は佐賀県の北西部、九州島の北端に位置し、現在の市役所本庁で北緯 33 度 27 分、東経 129 度 58 分である。平成 17、18 年に唐津市、浜玉町、厳木町、相知町、北波多村、肥前町、鎮西町、呼子町、七山村が合併し現在の唐津市となった。

唐津市およびその周辺の地形は①東松浦溶岩台地②松浦杵島丘陵③脊振山地西部④低地部（広義の唐津平野）⑤島嶼域（東松浦半島沿岸部も含む）の五つに区分できる。①東松浦溶岩台地（通称上場台地）は東松浦半島の大半を占め、第三系や花崗岩類の基盤の上に第三紀末期に噴出した東松浦玄武岩類が覆う溶岩台地である。②松浦杵島丘陵は南北に流下する佐志川及びその延長線を境にした東側の丘陵性山地であり、松浦川西岸まで続く。その地質は第三系や花崗岩類からなり、標高約200m内外である。③脊振山地西部は地形が急峻であり、地質は風化の進んだ花崗岩類からなる。唐津平野の基盤の大部分もこの花崗岩類であり、不整合面を介して沖積層が堆積する。④低地部は①～③に囲まれ、北は唐津湾および玄界灘に接する平野を総称している。

今回の調査地点は唐津城と城下を区切る通称肥後堀に面した唐津城三ノ丸の南端にあたる。地盤は黄褐色細砂であるが、ボーリング調査の結果、地表下７ｍまでが盛土と砂となっている。基盤層の花崗岩層までは地表下 14 ｍである。

（2）近世期の河川改修について

唐津平野を流れる松浦川等の河川改修については、近世後半代の文書によると唐津藩初代藩主の寺澤志摩守が大規模な河川改修を行ったことが伝えられ、『唐津市史』にも記載されている。そのうち松浦川については、「松浦川と波多川は合流せずに松浦川河口が二ノ門堀付近であったこと、波多川は町田川方面に流れ、河口は江の尻川付近にあったことが伝えられており、現在も歴史関係の読本の一部には河川改修前の想定復元図が掲載されている。

Fig. 3 は航空写真やボーリングデータ等を基に作成された地形分類図である（註1）。地形分類図によると、二ノ門堀は河口を埋め立てて造られたものではなく、松浦川の河口は現位置から動いていないこと、波多川の旧流路も江の尻川方面ではなかったことが復元されている。

地形分類図では、砂質微高地Ⅰ面（古砂丘列）と砂質微高地Ⅱ面（新砂丘列）に挟まれた場所が堤間湿地であったことが想定されている。この堤間湿地は市街地では砂丘列の方向に沿って東西方向に延びており、江の尻川流域付近まで到達している。江の尻川流域にも別の堤間湿地が広がっており、両湿地はつながっていた可能性もある（註2）。

この堤間湿地は、通常は河川のように水は流れていなかったと思われるが、低地であり、松浦川や町田川とつながっているため、増水時は容易に河川から水が流入してきたことが想定できる。堤間湿地が江の尻川とつながっていれば、松浦川方面から大量の水が江の尻川方面に流れることになる。この想定が近世後期に「波多川が江の尻川方面に流れていた」という伝承につながるのではないだろうか？

近世初頭の市街地付近の河川改修については、以前想定されていたような河川の大規模な付け替えの痕跡は現状では確認されておらず、それまでの河川の流れを利用して効率的に改修を行ったのではないだろうか。唐津城の三の丸南側の堀も堤間湿地を利用した位置となっている。また外町を区切る堀は、

町田川から続く堤間湿地を利用して造られている。現町田川河川内のボーリングデータでは、河床下部の深い位置まで河川堆積物が確認されており、現河道位置も古くから河川流路であったことが分かる。

地形復元に関してはデータが不足しているため、今後も更新していく必要があるものの、松浦川や町田川等の大きな河川の河道位置については大よそ捉えられているものと思われる。江戸初期の河川改修を含めた唐津城及び城下町の整備については、旧来の地形的な特徴を最大限利用しつつ、行われたものと考えられる。

第２節　歴史的環境（Fig. 4）

唐津市域の遺跡の変遷について概観する。

旧石器時代の遺跡は中尾二ツ枝遺跡(1)や枝去木山中遺跡(2)など、上場台地に集中して見つかっている。遺跡の密集度は北部九州でも指折である。

縄文時代早期の遺跡も上場台地に多いものの、前期以降になると上場台地以外の地域でも遺跡の発見例が増加する。徳蔵谷遺跡(3)や五反田松本遺跡(4)は、唐津平野中東部の佐志川流域と玉島川流域の拠点的な遺跡である。晩期には再び上場台地で遺跡の発見例が増加する。

弥生時代以降は唐津平野に遺跡が集中する。特に宇木・半田川流域及び松浦川・徳須恵川流域に遺跡が集中している。代表的な遺跡として菜畑遺跡(5)や中原遺跡(6)、宇木汲田遺跡(7)が挙げられる。唐津市域の遺跡の特徴として、桜馬場遺跡(8)や宇木汲田遺跡などを代表に、青銅器や玉類を副葬した墳墓が非常に多く見つかっていることが挙げられる。

古墳時代も弥生時代と同様の遺跡の分布傾向が見られ、松浦川・徳須恵川流域に久里双水古墳(9)や双水柴山古墳群(10)や竹の下古墳群(11)などが築かれる。新たな動向としては、玉島川流域では谷口古墳(12)や横田下古墳(13)など、古墳の築造が盛んになることが挙げられる。また島嶼部でも後期になると、瓢塚古墳(14)など小型の古墳を中心に古墳の築造が盛んになる。古墳以外では近年、仁田埴輪窯跡(15)で生産遺跡が、黒岩前田遺跡(29)では集落遺跡の調査が行われている。

古代の遺跡は発見例が少なかったが、徳須恵川と松浦川流域の千々賀古園遺跡(16)や中原遺跡では、墨書土器や木簡などが大量に見つかり、官衙関連遺跡であることが分かった。また市東部では古代以降、岩根遺跡(17)や鶏ノ尾遺跡(18)など鉄生産に関連する遺跡の発見例が増加している。

中世以降の遺跡も近年調査例が増えてきている。特に佐志川流域では、徳蔵谷遺跡や佐志中通遺跡(19)で館の可能性がある建物や道路跡が見つかっている。この他大型の建物跡は北部の塩鶴遺跡(20)でも見つかっている。これまで中世山城は市南部を中心に数多く分布していることが知られていたが、調査例が少なく、詳細は不明なものがほとんどであった。しかし近年波多城跡(21)や星賀城塞群(22)で調査が行われ、城域の構造が理解されるようになった。また岸岳城跡(23)や獅子城跡(24)では中世山城が石垣造りの近世城郭に造り変えられていることが調査により明らかとなった。この他、当地域は古園遺跡やセセリ谷経塚(25)など経塚の発見例が多いことも同時期の特徴の一つである。

近世における当地域最大の特徴は、市域の北部に名護屋城と周辺の陣屋(26)が築かれたことである。全国の大名が布陣し、周辺の丘陵や浦々のほとんどが関係する遺跡となっている状態である。また近世初頭に朝鮮半島より製陶技術が取り入れられ、岸岳周辺に窯が造られており、以降窯業生産が盛んとなったことも大きな特徴である。陶器生産は市域の南部から伊万里市・武雄市域が中心であり、唐津焼として全国に流通していたことが知られている。今回本調査を行った唐津城跡(28)については後述する。近年玉島川流域では谷口石切丁場跡(29)が確認され、再築大坂城に石垣石材を供給したと推測されており、

大きな注目を浴びている。また佐賀県文化財課（当時）による山城の分布調査が精力的に行われ、唐津市域における中世山城及び文禄・慶長の役に関連する陣跡は数量面積共に大きく増加している。

第３節　近世以降の唐津地域の歴史的展開

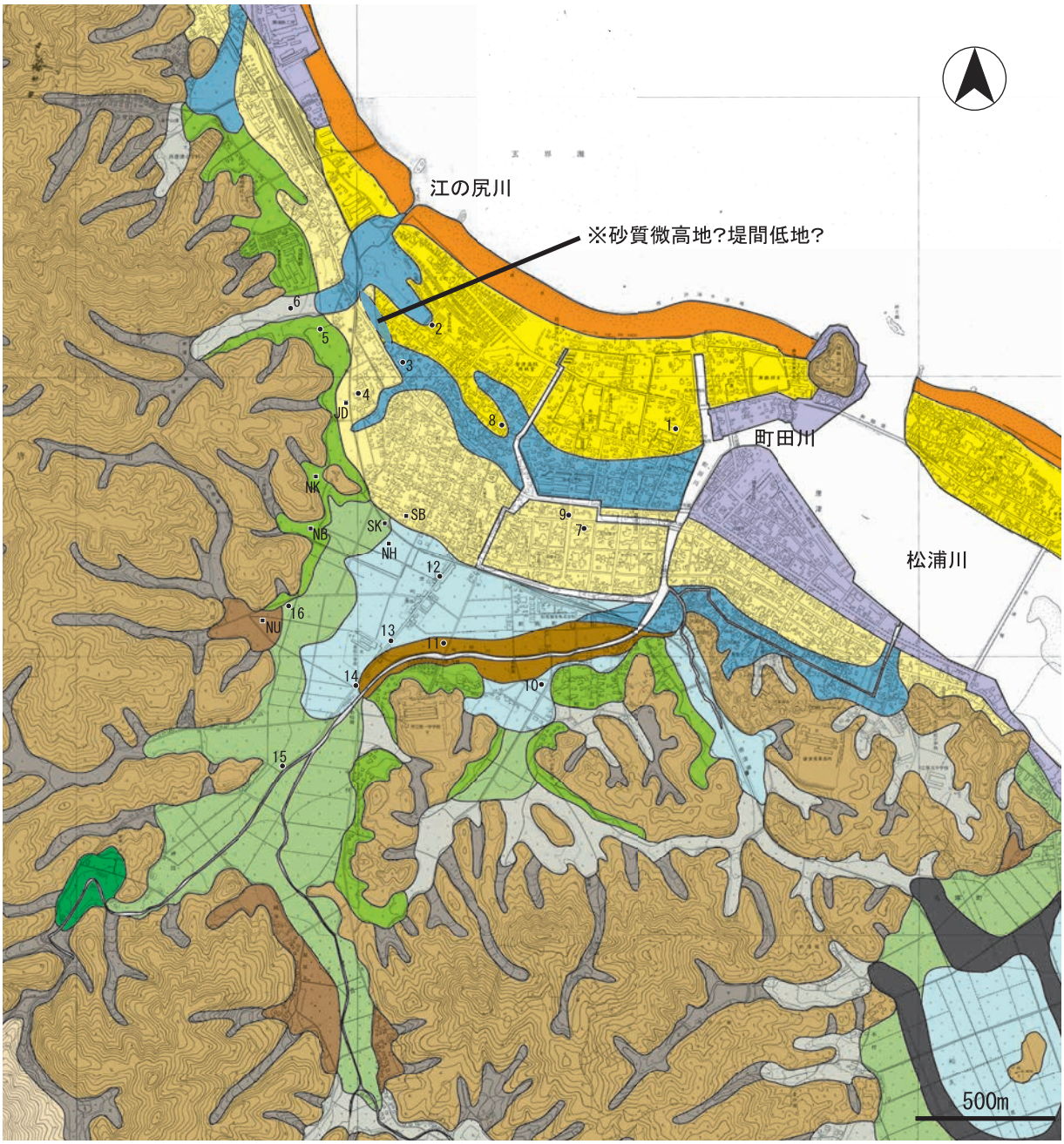
前述のとおり近世の唐津地域は、近世初頭に名護屋城並びに陣屋が築かれていることが最大の特徴である。名護屋城並びに陣跡は、文禄・慶長の役に際して朝鮮半島に侵攻するための前線基地として築かれた。全国から大名が集められたため、名護屋城周辺は一時期国内最大級の都市となっていた。文禄の役の開戦時、当地域の多くを支配していたのは中世以来の領主の波多氏であったが、役の最中に改易されたため、豊臣氏の直轄領を経て、その家臣であった寺澤志摩守広高が領主となった。寺澤氏は文禄慶長の役では、主に物資搬送担当として活躍していたが、役後は徳川家康との関係を深め、強い信頼を得ていた。慶長五（1600）年の関ヶ原の戦いでは東軍に属し、その功により肥後国の天草郡も領地として加増された。

寺澤氏は領主として積極的に領内の開発に務めている。河川改修や鏡及び和多田の新田開発を行い、防風林として虹の松原の植栽も行ったとされる。元和二（1616）年には領内の大規模な検地が行われており、公称 12万 3 千石に対し実高は 15万石余りであった。また城郭の整備も積極的に行なっており、定説では慶長七（1602）年から十三年にかけて唐津城を築城したと言われている。しかし現在行われている唐津城の石垣積み替えに伴う発掘調査では、現石垣の下層からさらに遡る時期の石垣が確認されている。これに関して山田洋氏により、唐津城は天正十九（1591）年に名護屋城の後詰として築城され、寺澤氏の入部以降増築や改修が行われた可能性が指摘されており（山田、2007年）、調査内容と整合的である。

寛永二（1625）年寺澤広高は次男の堅高に家督を譲り、寛永十（1633）年に71歳で他界している。同年には、豊後岡藩の中川氏が唐津城下を秘密裏に探索している。なお隠密による探索は、寛永四（1627）年にも行われている。

その後、寛永十四（1637）年に領有していた天草でキリシタンを中心とした大規模な反乱が起きた。反乱軍は翌年幕府及び周辺大名による総攻撃で鎮圧されたが、乱後の始末として天草は没収され、石高は 8 万 3 千石となった。その後、正保四（1647）年に堅高は自殺したが、堅高には継子がいなかったため寺澤氏は二代で改易される。

二年間の幕府直轄領を経て、慶安二（1649）年に大久保氏が播磨明石藩より入封する。以降、松平氏－土井氏－水野氏－小笠原氏と五代の譜代大名が治めることとなり、幕末を迎えた。大久保氏の治世には地方知行制を改め、蔵米知行制を採用し、転村庄屋制を定めるなど、後の唐津藩の大勢を決定づけることがいくつも行われており、また城内の大規模な改修も行っている。土井氏の治世では坊主町や唐人町に御用窯を開き、京焼風の唐津焼が作られるようになった。また藩校盈科堂を創設し奥東江を招き、教育に尽力した。その教えを受けた吉武法命やその子弟により、藩内に次々と民間塾が開かれたことにより、近世としては非常に広い層まで学問が広がった藩となった。水野氏の治世では唐津藩の中では最大の虹の松原一揆が起きている。水野氏は財政再建のため様々な施策を行っているが、その一つとして藩内の産業を『肥前国産物図考』としてまとめさせている。その他文化的な面として、唐津曳山の製作が始まったのもこの時期である。小笠原氏の治世はさらに財政が悪化したため、捕鯨を藩営としたり、様々な産物の専売制を強めたりした。長行は藩主長国の名代として藩政にあたり、藩政改革を断行し、また藩主ではないにもかかわらず異例の出世を果たし老中格として幕政の中枢を担った。



凡例

山地・丘陵　溶岩台地 頂部平坦面　溶岩台地 斜面　段丘　谷底斜面（支谷の埋積ないし侵食斜面）　沖積錐

谷底低地（支谷の埋積平坦面）　沖積氾濫原Ⅰ面（扇状地性低地）　沖積氾濫原Ⅱ面（扇状地性低地）

沖積氾濫原Ⅲ面（潟湖性低地）　旧流路　堤間湿地　自然堤防

砂質微高地Ⅰ面（古砂丘列、浜堤、砂嘴などの海岸州堆積物を含む）

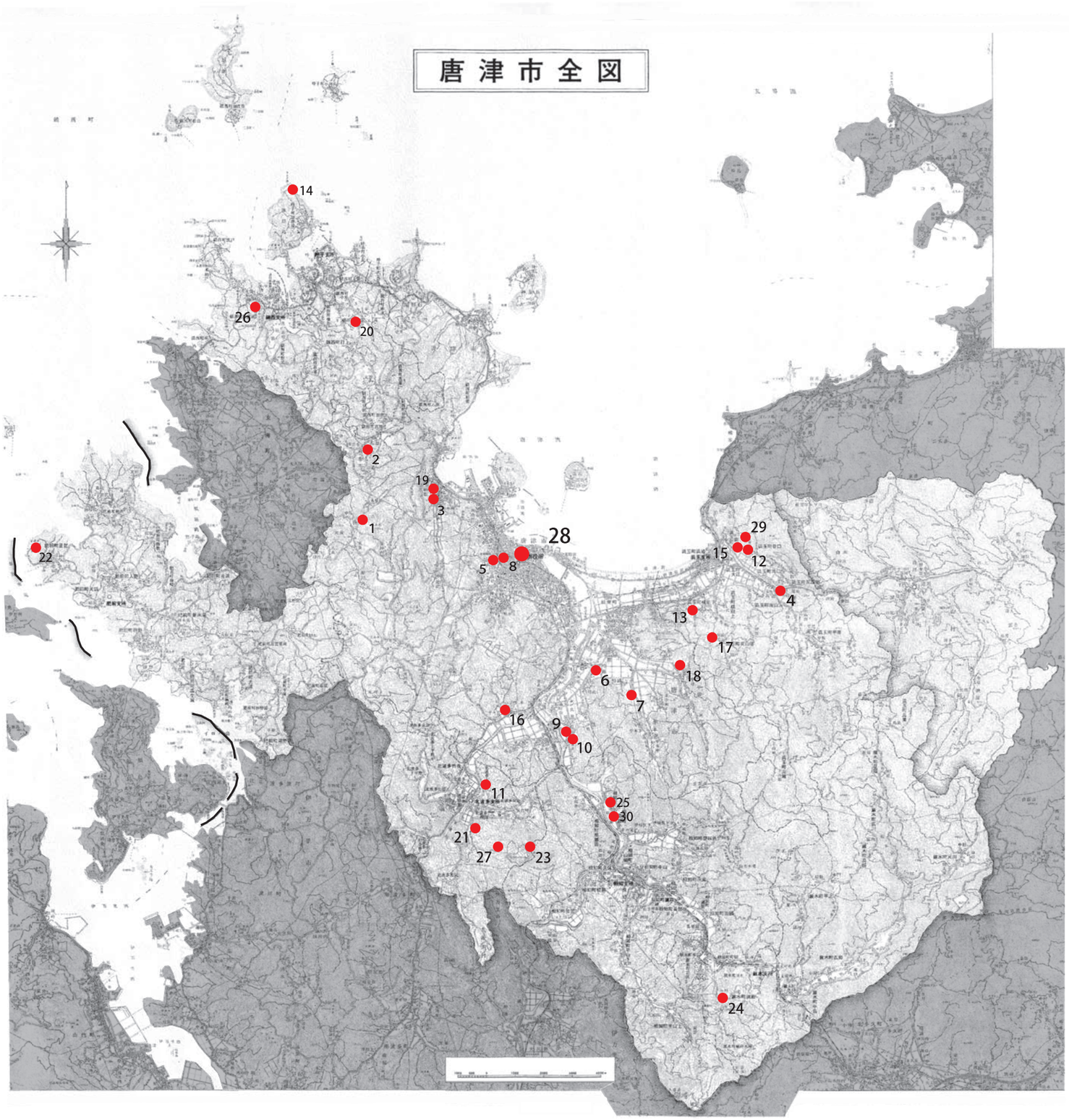
砂質微高地Ⅱ面（新砂丘列、浜堤、砂嘴などの海岸州堆積物を含む）

前浜、後浜、砂嘴　埋立地、大規模改変地　水域（現流路、現海域、埋め立て部分を含む唐津城の堀）

● ボーリング地点

■ 主要な考古遺跡の位置（NB: 菜畑、NU: 菜畑内田、NK: 菜畑八反間、NH: 菜畑八丁、SB: 桜馬場
SK: 桜馬場近接地＜しがらみ状遺構検出地点＞、JD: 巡見道、SD: 佐志中通、TD: 徳蔵谷、SI: 汐入）

Fig.３　地形分類図



1：中尾二ツ枝遺跡
2：枝去木山中遺跡
3：徳蔵谷遺跡
4：五反田松本遺跡
5：菜畑遺跡
6：中原遺跡
7：宇木汲田遺跡
8：桜馬場遺跡
9：久里双水古墳
10：双水柴山古墳群
11：竹の下古墳群
12：谷口古墳
13：横田下古墳
14：瓢塚古墳
15：仁田埴輪窯跡
16：古園遺跡
17：岩根遺跡
18：鶏ノ尾遺跡
19：佐志中通遺跡
20：塩鶴遺跡
21：波多城跡
22：星賀城塞群跡
23：岸岳城跡
24：獅子城跡
25：セセリ谷経塚
26：名護屋城跡並びに陣跡
27：岸岳古窯跡群
28：唐津城跡
29：谷口石切丁場跡
30：黒岩前田遺跡

Fig. 4　唐津市内主要遺跡位置図

石炭は土井氏の治世には発見されていたようだが、幕末になると船舶の燃料として需要が急速に高まり、西日本の雄藩も石炭を得るために唐津市域で炭鉱を開いている。石炭産業は明治以降も産業の中心も担うものであった。石炭の採掘は当初中小炭鉱主が主体であったが、明治後半になると三菱や三井等の大手が進出し、大規模に石炭の採掘を行っている。石炭産業は戦後も続いたが、昭和 40 年にはすべて閉山し、近代以降の唐津地域の産業の中枢が失われることとなった。

今回の調査地は唐津城三の丸の南端にあたり、近世を通じて屋敷地とその間を通る道路であった（註 3）。道路は西ノ門脇(横)小路、大手脇(横)小路と呼ばれていたようである。近代も、屋敷地となっていたが（註 4）、明治 34 年に辰野金吾設計の唐津小学校が建てられた。小学校は男子小学校と女子小学校として校門より東西に分けられていた。その後の増築を経て、昭和 39 年まで小学校として利用されていた。その後唐津市役所が移転して現在に至っている。

註

１：今回提示した復元図は、作成時点で入手できたボーリングデータや発掘調査例から作成したものである。事例が増えると、当然更新していく必要がある。復元では二ノ門堀幅を超える河川の痕跡はなかったと考えられている。

２：湿地間のボーリングデータがないため復元できていないが、佐賀県立図書館データベースの明治14年測量図によると、この堤間湿地を通る小河川が江の尻川へ合流しており、湿地はつながっていた可能性が高いようである。

３：一時期通称“肥後堀”際の通路は馬場として利用されていた。

４：明治初頭の絵図では、現市役所の位置の屋敷地に家主名の書き込みがなく、学校建設時には空き地であった可能性もある。

●参考文献（※報告書全体）

天草市立天草キリシタン館　2020　『仁義の侍　三宅藤兵衛』
飯田義之　2011　『そば猪口図鑑』　青幻舎
家田淳一・川内野啓子　2012　『古伊万里の文様集成』　九州陶磁文化館
伊藤淳史　2020　「道路遺構の考古学的検討に向けて－京都大学構内遺跡での検出事例から」『京都大学構内遺跡調査研究年報』
岩瀬彰利　2002　『吉田城址（Ⅴ）』　豊橋市教育委員会
岩原剛　2006　『吉田城址（Ⅷ）』　豊橋市教育委員会
宇治章・藤井伸幸　1994　『よみがえる江戸の華―くらしのなかのやきもの―』　九州陶磁文化館
江戸遺跡研究会　2001　『図説　江戸考古学研究辞典』　柏書房
唐津市教育委員会　2018　『唐津の明治維新と近代化』
唐津市史編纂委員会　1962　『唐津市史』　唐津市
北波多村史執筆委員会　2011　『北波多村史―通史編Ⅰ・Ⅱ』　唐津市教育委員会
九州近世陶磁学会事務局　2000　『九州陶磁の編年』　九州近世陶磁学会
厳木町史編纂委員会　2011　『厳木町史　下巻』　唐津市
坂井清春　2013　『唐津城跡本丸１』　唐津市教育委員会
坂井清春　2014　「唐津藩寺澤氏による領内支配体制の形成」『公益財団法人鍋島報公会　研究助成研究報告書　第６号』　公益財団法人鍋島報公会
佐賀県立図書館　データベース「古地図・絵図」
新版鎮西町史編纂委員会　2001　『鎮西町史　上巻』　鎮西町
永井久美男　1997　『近世の出土銭Ⅰ』　兵庫県埋蔵銭調査会
永井久美男　1998　『近世の出土銭Ⅱ』　兵庫県埋蔵銭調査会
仁田坂聡・美浦雄二　2014　『末盧国遺跡群』　唐津市教育委員会
藤木聡　2013　「発掘された火起こしの歴史と文化」『宮崎県文化講座研究紀要　40』
美浦雄二　2019　『唐津城跡（10）』　唐津市教育委員会
宮崎博司　2018　「絵図からみた唐津城下町の変遷」『公益財団法人鍋島報效会　研究報告書　第８号』　公益財団法人鍋島報效会
山下文子・徳永貞昭　2012　『将軍家献上の鍋島・平戸・唐津』　九州陶磁文化館
山田洋　2007　「庄屋文書にみる唐津城築城年代の一考察」『末盧國』172　松浦史談会

第Ⅲ章　遺　構

第１節　調査の概要

前述のとおり、調査は不十分なものとなった。今回調査で見つかった遺構は遺跡内の最終的な遺構面で見つかったものである。調査区東半ではトレンチの断面でピットや掘り込みが確認できたものもあった。埋戻し前にＨ28確認調査トレンチ付近を一部深掘りしたが、調査区東壁沿いのサブトレンチ１と同様に、検出面から１ｍ程度までは下記の3層が続いていた。

遺構は旧唐津小学建設以前のもの（明治34年より前）と、それ以降に分けることができる。調査は便宜的に北から１・２・３区とし、１区は東半を1A区、西半を1B区とした。１区は旧唐津小学校の建物が建てられていなかった場所にあたり、近世～現代の遺構やカク乱が同一レベルで検出された。そのため、遺構の時期は分からないものもある。２区はほぼ全面に旧唐津小学校の建物礎石列が確認されたが、同位置では道路状遺構が見つかったが、一部がその上面は灰白色砂に覆われており、その箇所については遺構の新旧を知ることができた。３区は旧唐津小学校の建物が建てられていなかった部分にあたるが、カク乱が非常に激しかったため遺構は確認できず、遺物もほぼ出土しなかった。

第２節　層序

土層図として２カ所のトレンチ土層図と基本土層模式図を掲載した（Fig.6）。土層模式図は一部の土層図と調査写真を基に作成した。１層は現代のカク乱であり、市役所建設時以降の層である。２層は炭化物や赤褐色土を含む。調査区の東側に分布する。近代～現代。３層も炭化物や赤褐色土を多く含む。土質は場所により砂質に多寡があり一定しない。近世。４層は黄褐色細砂であり、部分的に赤褐色土が斑状や薄い層状に混じる。盛土層。混入物がない箇所では、地山との区別はできない。

第３節　遺構

調査では２区について上面下面に分けて遺構実測を行ったが、１区の北東隅の土坑群が学校建設以前のものか分からないため、図上では下層遺構配置図に土坑等に入れ、上層遺構配置図には学校建物礎石とカク乱のみとした。そのため、オルソとは掲載遺構に差がある。

（１）上層

①礎石列

礎石は遺構検出面よりも上部に突き出ており、礎石の抜けは市役所建設の際の造成によるものと思われる。建物の主軸は西に６度振れる。東西方向の礎石は３列確認した。東西列２－３間は、後述する掛軸との対比により廊下にあたることが分かる。礎石間はおおむね1.8ｍ。南北方向は礎石が抜けているものがほとんどであり、根石が認められるものと浅いくぼ地だけのものがあった。南北列１では一石礎石が残存しており、他の礎石よりも小型であることが分かる。礎石間は0.9ｍ。

後述する掛軸との比較により大よそどの辺りの礎石であるかは把握できるが、絵図の一部がデフォルメ化されているため、どの教室の場所にあたるのか、位置の特定は難しい。

②その他

SK002は下半から瓦が多く出土した。出土した瓦は小学校に葺かれていたものと思われる。カク乱１では南壁の土層図を作成した。

（２）下層

①道路関係遺構

・SD001

1B区で発見された浅い直線溝。SX015の発見により、道路脇の溝であることが分かった。南端はSK002に切られているが、これ以上南には延びない。埋土は黒褐色砂の単層であり、水流の痕はなく、SD014とは異なる。屋敷と道路との区画溝であろうか。

・SD014

礎石列検出時に、同レベルで小振りの白味が強い花崗岩の石列が見つかっていた。石列は礎石列とは方向が違っており、別遺構の可能性も考え、礎石と合わせてサブトレンチを入れて確認した。その結果、溝の東肩側の石列と分かり、SD014とした。溝の西肩側は栗石が残存しており、数石の石積みがあった可能性が高い。南壁近くは現代の水管等に乱されているため、幅が分からなくなっている。埋土は２層に分かれ、上層が粘質土、下層が赤褐色土や礫を含む砂質土である。

・SX013

SD014上面の遺物の集中をSX013とした。遺物は瓦小片がほとんどを占める。SX013確認後、サブトレンチを入れたところ、SX013はSD014埋没後のくぼ地に投棄されたものと分かった。

・SX015

２区で見つかったＬ字状の幅3～4ｍの連続した硬化面をSX015とした。唐津城下の絵図との比較により屋敷間を通る道路と分かった。硬化面は灰褐色を呈し、径1～3㎜程度の小礫を少量含む。厚さは0.5～1.0㎝の箇所が多い。硬化面の下層は褐色砂質土であり、カク乱1南壁では褐色砂質土だけが残存する。2区南壁では数層の硬化面が見つかっており、道路の補修が幾度も行われていることが分かる（註１）。硬化面は調査区西壁上でも見つかっている。SD014の上層にあたっており、SD014の利用停止後の改変が行われていたことが分かる。屋敷に入るためのスロープ状の通路であろうか。SX015の一部を覆う灰白色砂より陶磁器等が出土している。

③その他（SK003・SE004・SK007・SE005・SK006・SK008・SK009・SK010・SK012）

SK003と007は大きさが大よそ同様の土坑。埋土上層から遺物が出土した。SE004・SE005・SX008・SK009・SK010は近接しており、屋敷内の土地利用状況を表しているものと思われる。出土遺物により、最終的な利用の下限は近代であろう。SE004と005はSEとしているが、浅い石組み遺構であり、埋土には水流の痕は見られなかった。SX008は陶器大甕が据えられる。甕は肩部がなく、意図的に打ち欠かれた上で据えられたものか。この他にも上記の遺構に切られた土坑があった。

その他、サブトレンチ２からは、トレンチ底面の４層から平石が2石見つかったが、広がりを確認していないため、遺構に伴うものか不明である。

註

１：２区南壁の土層観察では硬化面の下層には土坑の断面が認められる。土坑埋土には硬化面の土が混じっており、土坑掘削前にも道路が造られていたことが分かる。

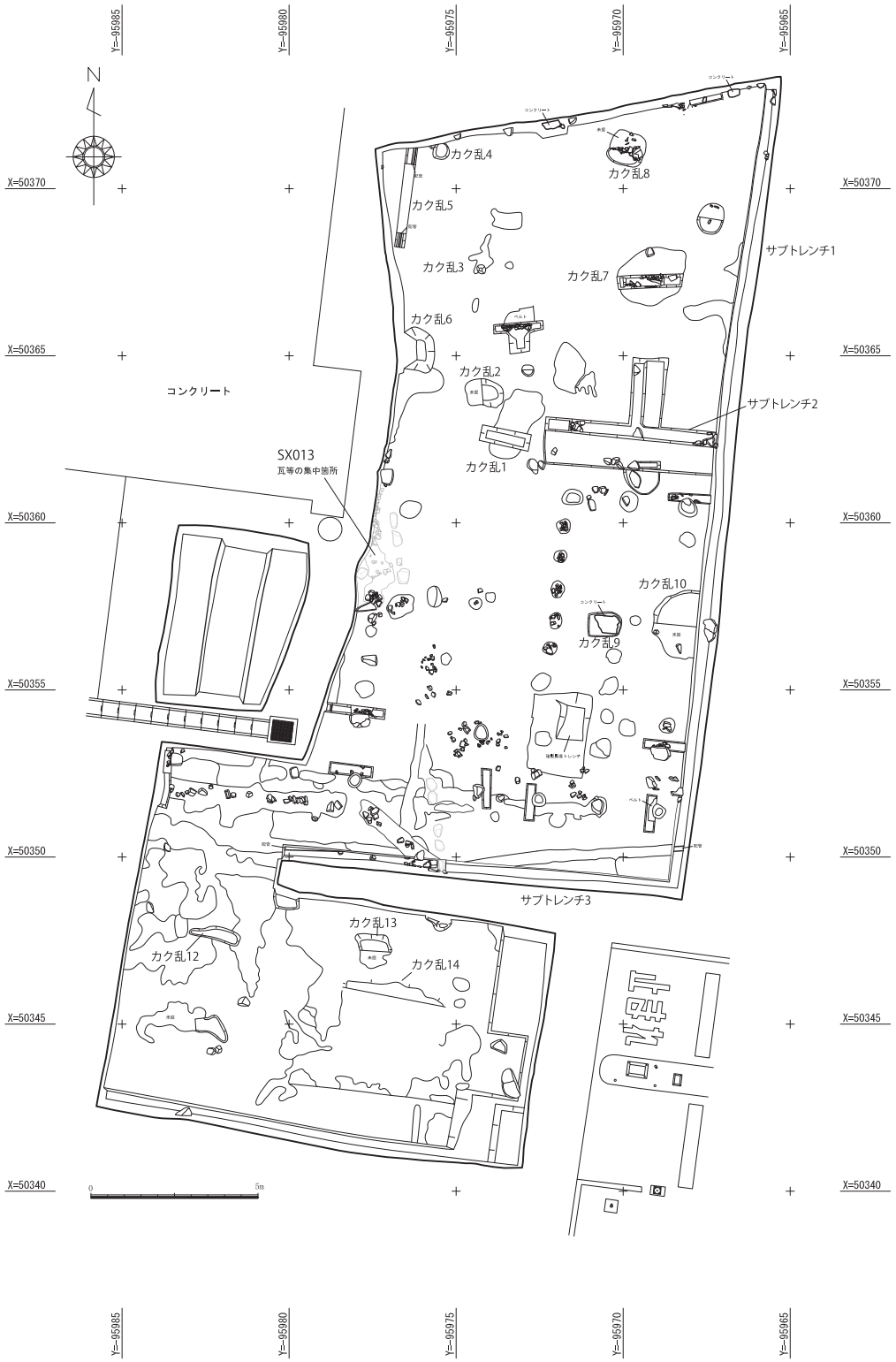
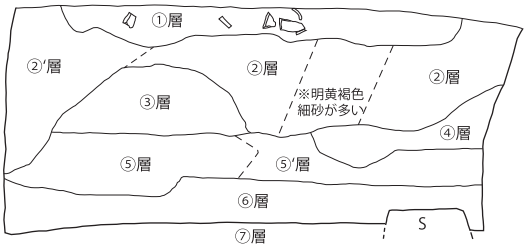
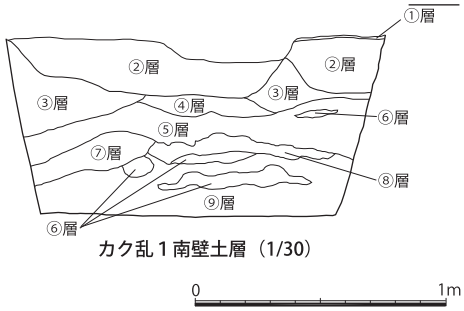


Fig. 5　調査区上層遺構配置図（1/200）



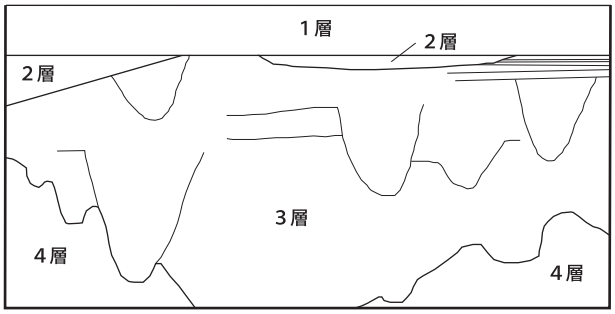
サブトレンチ２西壁土層（1/30）

①層：Hue10YR 暗褐色 3/4
　砂質土
　粘性なし
　炭化物が非常に多く、遺物も多い
　礫を含む
②層：Hue7.5Y 明褐色 5/6
　細砂
　炭化物、赤褐色土粒を少量含む
　②'層は色調同一で、
　赤褐色土粒が多く、小礫を少量含む
③層：Hue10YR 明黄褐色 6/6
　細砂～極細砂
　斑状に極少量のｵﾘｰﾌﾞ褐色極細砂を含む
④層：Hue10YR 明黄褐色 6/6
　極細砂
　Hue10YR 黒褐色 3/2 極細砂が斑状に混じる
　ｵﾘｰﾌﾞ褐色極細砂、褐色極細砂を含む
⑤層：Hue5YR 明赤褐色 5/6
　粘質土
　白色粘質土、黒褐色砂が斑状に少量混じる
　明褐色細砂が層の上下端に多い
⑤'層：明赤褐色土、灰白色粘質土、明褐色細砂が
　斑状に混じる
　部分的に黒褐色砂が混じる
⑥層：Hue10YR 褐色 4/6
　細砂
　斑状に明赤褐色土が少量混じる
⑦層：Hue10YR 黄褐色 5/6
　細砂
※①～⑤層は基本土層の３層、⑥⑦層が４層にあたる

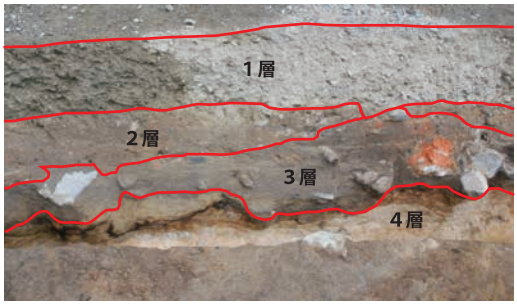


カク乱１南壁土層（1/30）

①層：Hue5YR 橙色 6/6
　砂質土
　しまりが非常に強い
　硬化面の下層の土
②層：Hue10YR 黄褐色 5/6
　砂質土
　しまりなし
　径 5mmまでの小礫を多く含む
③層：Hue10YR 明黄褐色 6/6
　細砂～極細砂
　②層よりも土分、礫を多く含む
④層：Hue10YR 明黄褐色 6/6
　細砂
　礫は含まない
⑤層：Hue10YR 明黄褐色 7/6
　極細砂
　しまりなし
⑥層：Hue2.5Y オリーブ褐色 4/4
　極細砂
　しまりなし
⑦層：Hue10YR 明黄褐色 6/6
　細砂～極細砂
⑧層：Hue10YR 褐色 4/4
　極細砂
⑨層：Hue10YR 黄褐色 5/6
　極細砂
※①～③層が基本土層の３層、
　④～⑦層が４層にあたる



基本土層模式図（調査区東壁がモデル、下写真）



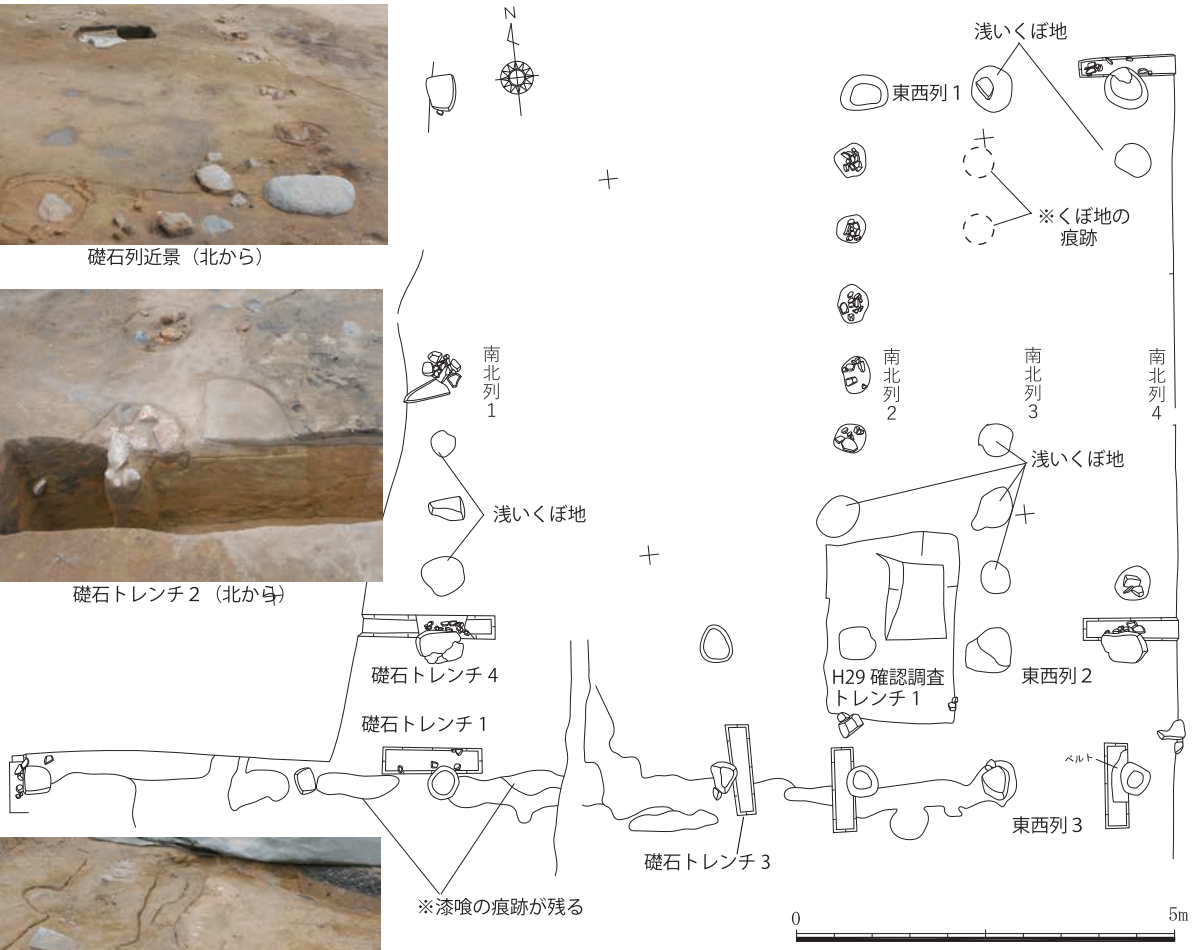
１層：市役所建設以降の層
　カク乱、バラス
２層：小学校時代？～市役所建設時
　よく撹拌された砂質土
　炭化物、礫、赤褐色土粒を多く含む
３層：小学校建設時～近世
　細砂～粘質土
　色調、しまり、粘性も様々
　幾度も造成が行われている
　土坑や道路跡等様々な遺構が見つかる
　堀込面もいくつか見られる
４層：近世～
　黄褐色細砂
　赤褐色土粒や褐色砂が混じるが、
　混入が見られない箇所は地山と
　区別できない
※調査区西半では１層直下が４層の箇所もある
　遺構検出面は３層と４層上面

Fig. 6　トレンチ土層図、基本土層模式図

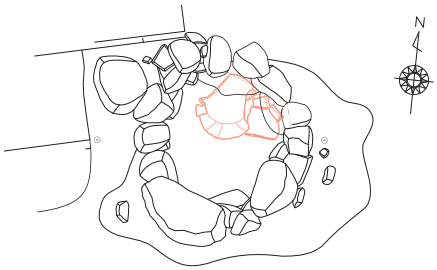
礎石列近景（北から）

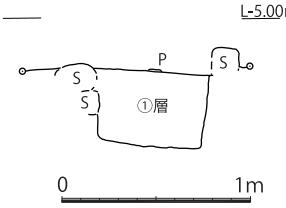
礎石トレンチ２（北から）

漆喰の残存状況（礎石トレンチ１付近）



礎石列（1/100）





SE004土層
①層：色調Hue2.5Y暗オリーブ褐色3/3の砂質土に、
色調Hue10YR褐色4/4の細砂が斑状に混じる。
また径5mmまでの小礫が少量混じる。
しまりあり。検出面から陶器すり鉢と甕が出土し、
埋土から瓦片が数点出土。

SE004（1/40）

Fig. 7　礎石列、SE004（1/100、1/40）

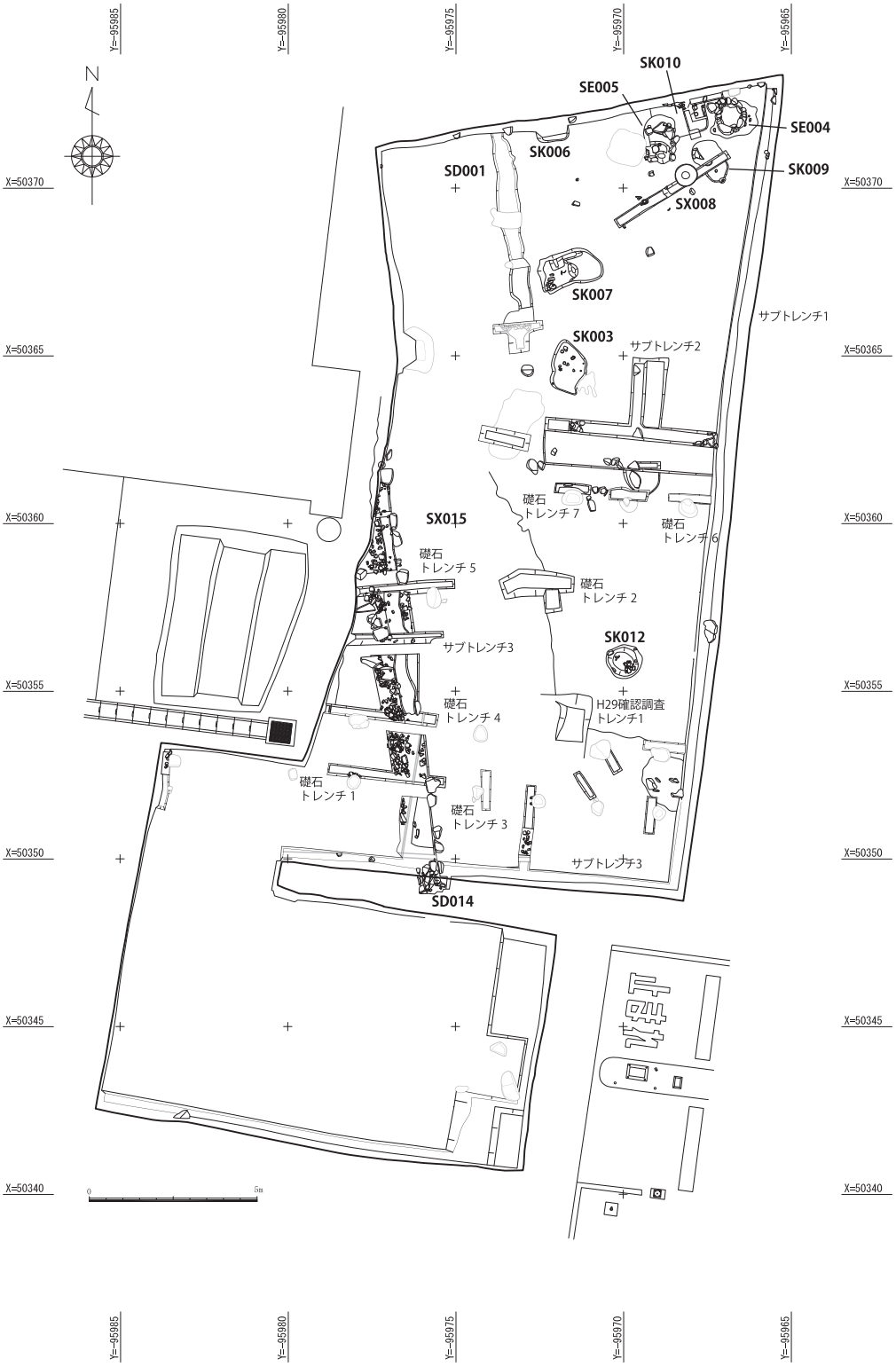


Fig. 8　調査区下層遺構配置図（1/200）

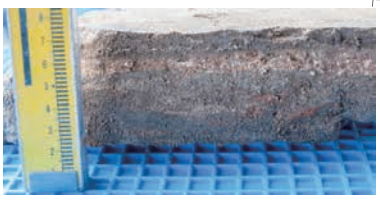
Fig. 9　調査区下層オルソ（1/200）

調査区壁面に続く硬化面

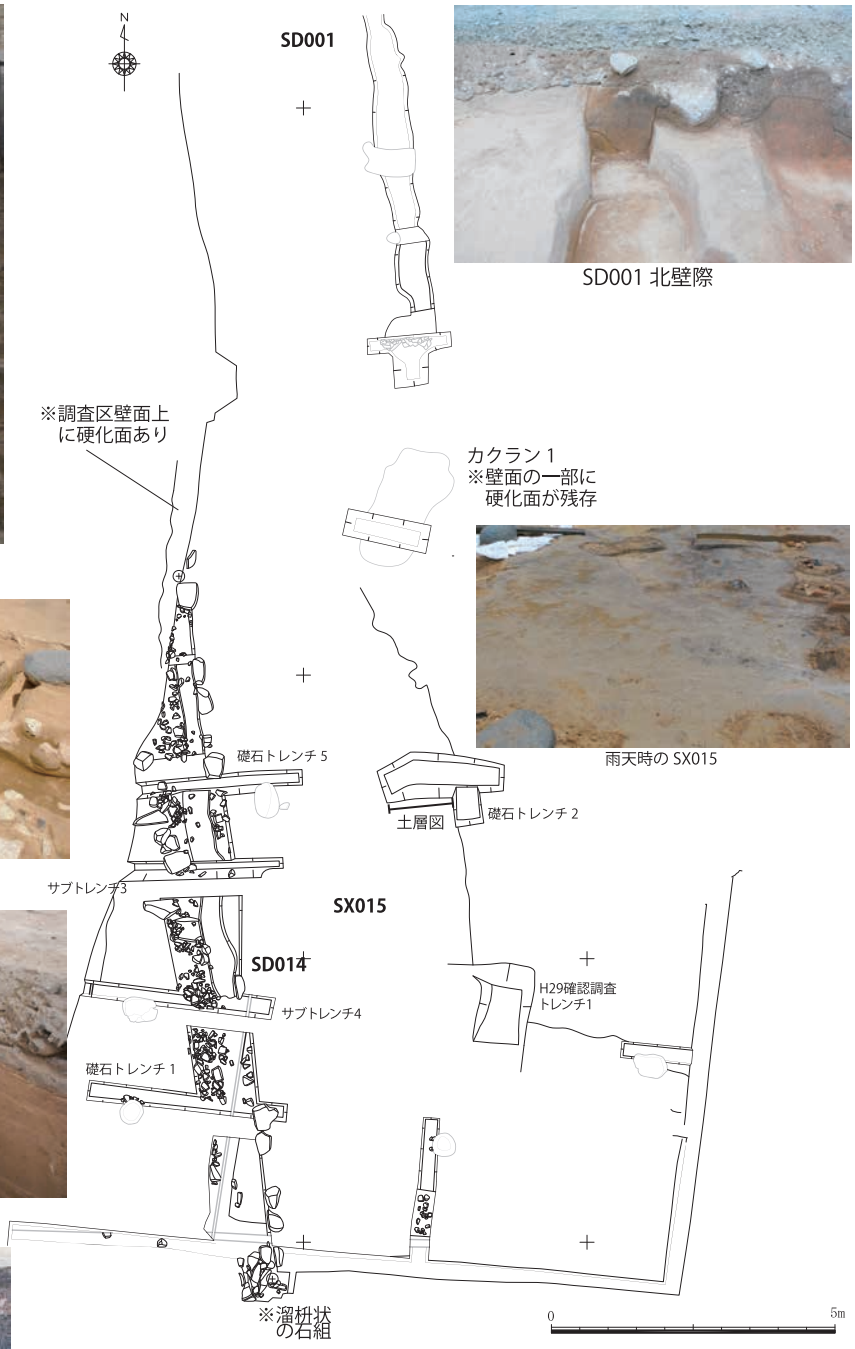
SD001 北壁際

SD014 石列

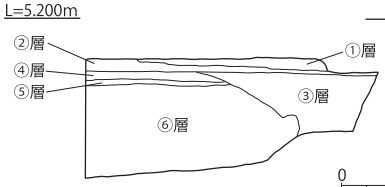
SD014 南壁土層


硬化面拡大写真

雨天時の SX015



SD014・SX015（1/150）



礎石トレンチ２南壁土層（1/30）

礎石トレンチ２南壁
①層：カクラン
炭化物、赤褐色土が混じる
②層：Hue2.5Y 黄褐色 5/3
タタキ状の硬化面
しまりが非常に強い
③層：Hue10YR 褐色 4/6
細砂
しまりなく、粘性弱い
④層：Hue10YR にぶい黄褐色 5/4
細砂
しまり、粘性なし
⑤層：Hue10YR 明黄褐色 6/6
タタキ状の硬化面
2～3mmの小礫を含む
しまり強い
⑥層：Hue10YR 明黄褐色 6/6
細砂
しまり、粘性なし

Fig.10　SD014・SX015（1/150）、礎石トレンチ２南壁土層（1/30）

第Ⅳ章　遺　　物

第１節　陶磁器・土器

（1）陶器

1～14は陶器碗。1～10は、淡黄色の胎土に透明釉をかけたいわゆる献上手といわれるもの。1～3は体部が直立気味に立ち上がる腰が張ったもの。1は浅手の筒形の碗。4は胴部が直線的に外反する。5、6は同一地点から出土した同形状の深手の碗。7は呉須で松を描く。8は高台径が小さく低い。胴部に笹文を描く。京焼か京焼を模したもの。9は腰が張り、体部に雲鶴文を象嵌する。10は体部と底部は接合しないが同一個体。釉の発色が悪い。11は体部下半に刳り込みを入れる。12は胎土が粗く、ススが付着する。高台にケズリを入れ、凸状に巡らす。14は大ぶりの碗。15～20は陶器皿。16は内面見込みに模様を描くが、意匠は不明。17は口縁部が大きく外反し、なぶり口にしたもの。18は内面見込みに黒褐色の呉須を象嵌した梅花文を描く。20は無釉。21は志野の向付の底部か。22は火入。体部に指頭による凹凸をつける。23は器種不明。上下も分からないが、下方と考えている側に円形や細形の透かしを入れる。胎土は淡黄色で、透明釉をかける。24は鍋か。外方に半円環形の耳をつける。25～27は蓋。25は行平鍋の蓋か。26は内面見込みに墨書があるが、判読できない。27は灯篭を模したもので、蓋もしくは陶製玩具。28～35は鉢。28は無釉の焼締陶器。29と30は片口が付く鉢。白化粧土を刷毛塗する。31も白化粧土を刷毛塗りし、胴部に模様を描くが、意匠は不明。33は外面見込みに墨書があるが、判読できない。34と35は釉調が同じであり、同一個体の可能性がある。36～39はすり鉢。36と37は備前焼のすり鉢口縁部。38は高台がつく。39は深手のすり鉢。40は焼き締め陶器の胴部片と思われ、上下傾き共によく分からない。貼り付けにより草花を表現する。41は小型の甕。42はSX008出土の大型甕。胴部以下は完形であるが、口縁部は一部だけの出土にとどまり、接合しない。

（2）磁器

43と44は小杯。45～48は碗。47は丸文を描き、内面見込みを蛇の目釉剥ぎする。48は稲束を描く。49と50は紅猪口。50は扇文を描く。51～54は紅皿。55と56は小皿。44と55の文様は紅葉であろうか。57～70は皿。今回の調査で出土した磁器の中では蓋と並び最も多く出土した。57は白磁輪花皿。58～60は染付の輪花皿。61は高台が低く、器壁が薄い。63は内面見込みを蛇の目釉剥ぎする。66は型打ち成形を併用する。内面に松竹梅文を描く。67と68は角皿。67は型紙摺で山水文を描く。68はH28確認調査の１トレンチ出土品（第177集 Fig.91-76）と接合した。型押しにより唐草文と七宝を、染付により牡丹等の草花の文様を描く。今回の出土品の中では比較的精緻に作られたもの。69と70は中型の皿。見込み部に針支え痕が残る。71は大型の鉢。内外面に山水人物文を描く。72は八角鉢。74は蕎麦猪口。75と76は仏飯器。77と78は火入。82～93は蓋。82は野中烏犀園の薬容器蓋。80～83は環状の把手が付く。81は牡丹を描く。84～93は皿状のもの。85は蕪と羽子板、87は福寿字文、88は壽字文を描く。93は鷺と水辺植物を描く。

（3）土器・瓦質土器

94は弥生土器甕（深鍋）の逆L字状の口縁部片。95～98は土師器皿。95は丸底気味の平底。口唇部にススが付着する。器面は剥離するが、元はミガキが入れられていたか。98は付着物がつく。99は焼塩壺の小片。100はロクロ成形されたもの。焼塩壺の可能性を考えたが、カク乱出土のため、現代のものの可能性もある。101～105、108は瓦質土器。101は風炉。質はよくない。胴部外面に刻印により文様を

刻す。102と103は硬質瓦質土器の角火鉢片。同一地点から出土したもの。104と108は焜炉片。105は火鉢か。表面の剥離が進む。106と107は同一形状の不明品。蓋か？釉状のものが付着する。106はブリッジ状の部分の中央に上面から穴を穿つ。

第２節　土製品・瓦・石製品・金属製品等

109は土製人形。童子像か。一部欠損する。紐を握っており、犬連れであったか。表面には剥離剤の雲母細片が付着する。110は陶製人形の脚部片。111と112は窯道具。転用したものか。113も窯道具か。上下面に糸切痕がつく。114も窯道具か。115～120は円盤形土製品。陶器片を再利用したもの。121はレンガ。耐火レンガ。「OTK　SK34」の刻印がある。SK34は耐火度を示す表示で、最高使用温度は1340度。

122～127は軒丸瓦。今回の調査では、瓦の出土は多くなかった。122と123は瓦当面がほぼ完存する。122は楕円形を呈し巴左巻き珠８。巴文の尾は長い。123は巴右巻き珠８。巴文の尾は短い。器面が磨滅する。124は巴右巻き珠11。巴文の尾は長い。125は巴右巻き珠が11か？巴文の尾は長い。126は巴右巻き珠が11か？巴文の尾は短い。127は小型の軒丸瓦で、外縁が狭い。蕨手三つ巴文軒丸瓦。唐津市内で初めて出土した。類例は天草の富岡城跡と河内浦城跡で知られている。128と129は軒平瓦。129は中心飾り上向き五葉文。130はSK002出土の大型の鬼瓦の一部。一部に漆喰が付着し、針金も残存する。旧唐津小学校のものか。

131と132は砥石。131はケズリによる面取りが行われる。133～139は火打石。133～138は徳島県阿南市大田井産のチャート製。青灰色～灰色を呈する。135は使用による剥離がみられる。139は石英製の白色半透明の火打石。使用による剥離が進んだ隅角が多く残存。また一部に鉄錆が付着しており、火打金によるものか？

140はガラス製薬瓶。141はSK012出土の南京錠の完形品。142も錠前か。143は碗形鍛治滓。144～156はキセル。144～147は雁首。144は火皿の一部が欠けるものの、ほぼ完形。火皿内部に炭化物が残存する。全体に黒色の被膜が残る。基部上面に「大作？」の彫り物がある。唐津市域で見つかったキセルには、彫り物があるものはほとんど見つかっていない。145は若干小ぶりなもの。146は黒色の被膜が厚く、漆か？火皿が破損する。147は火皿からの屈曲部が短く、器壁に厚みがある。148～156は吸口。148～150・153は竹製ラウ。154に挿入された形で出土。157は小刀の柄部。158～162は銅製の部材や金具片。163は裏に小突起が２カ所あり、はめ込まれていた飾り金具と思われる。164は雁首銭。165～175は銅銭。165～174は寛永通寶。165～170は古寛永で、171～173は新寛永。174も新寛永と思われる。175は昭和28年の十円銅貨。176と177は鉄砲玉か。178は碁石。179は木葉形の匙。朱泥陶器か。180と181は円盤状製品。材質は不明。182～185はろう石。チョークとして用いられたか。

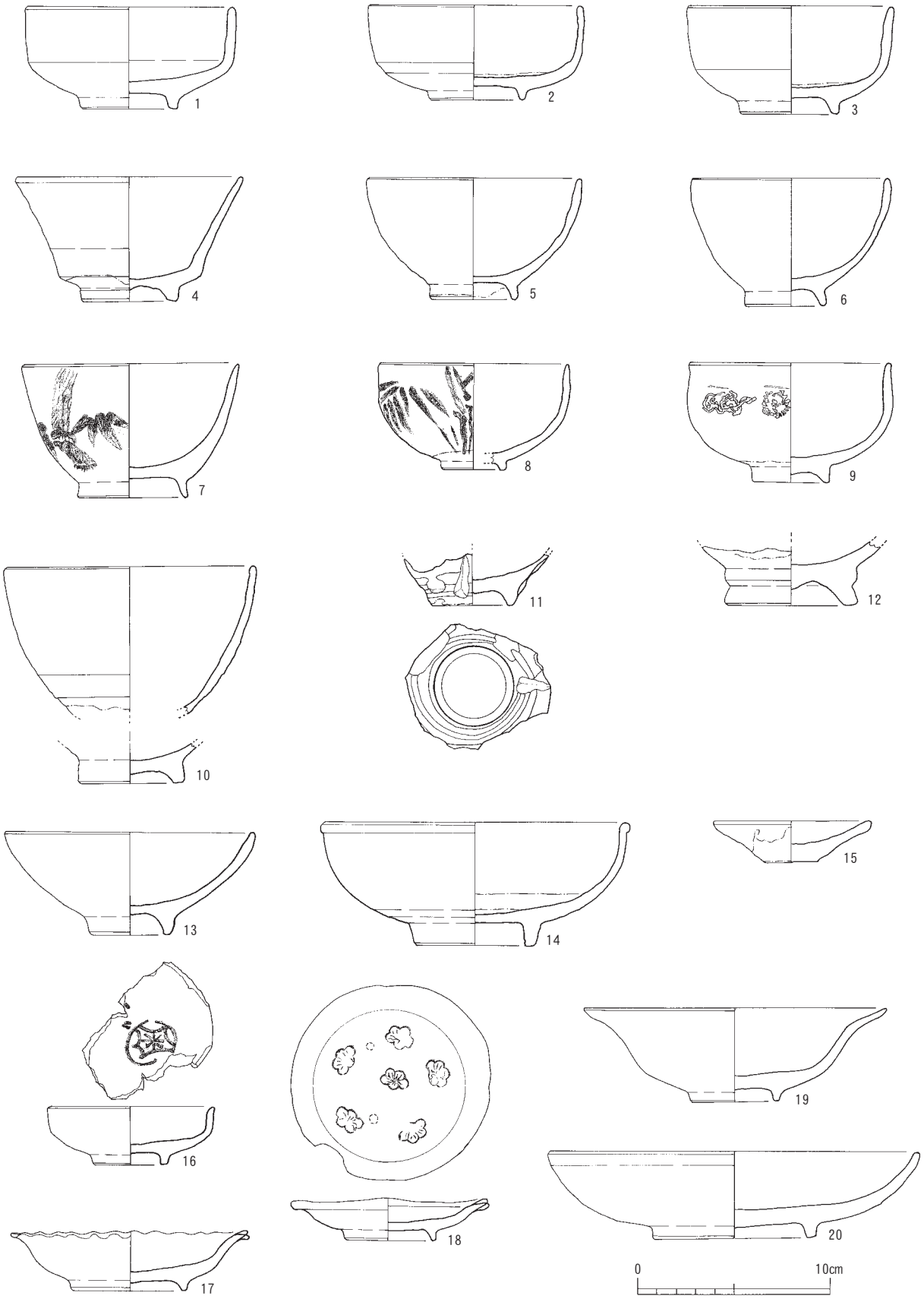


Fig.11　遺物実測図①（1/3）

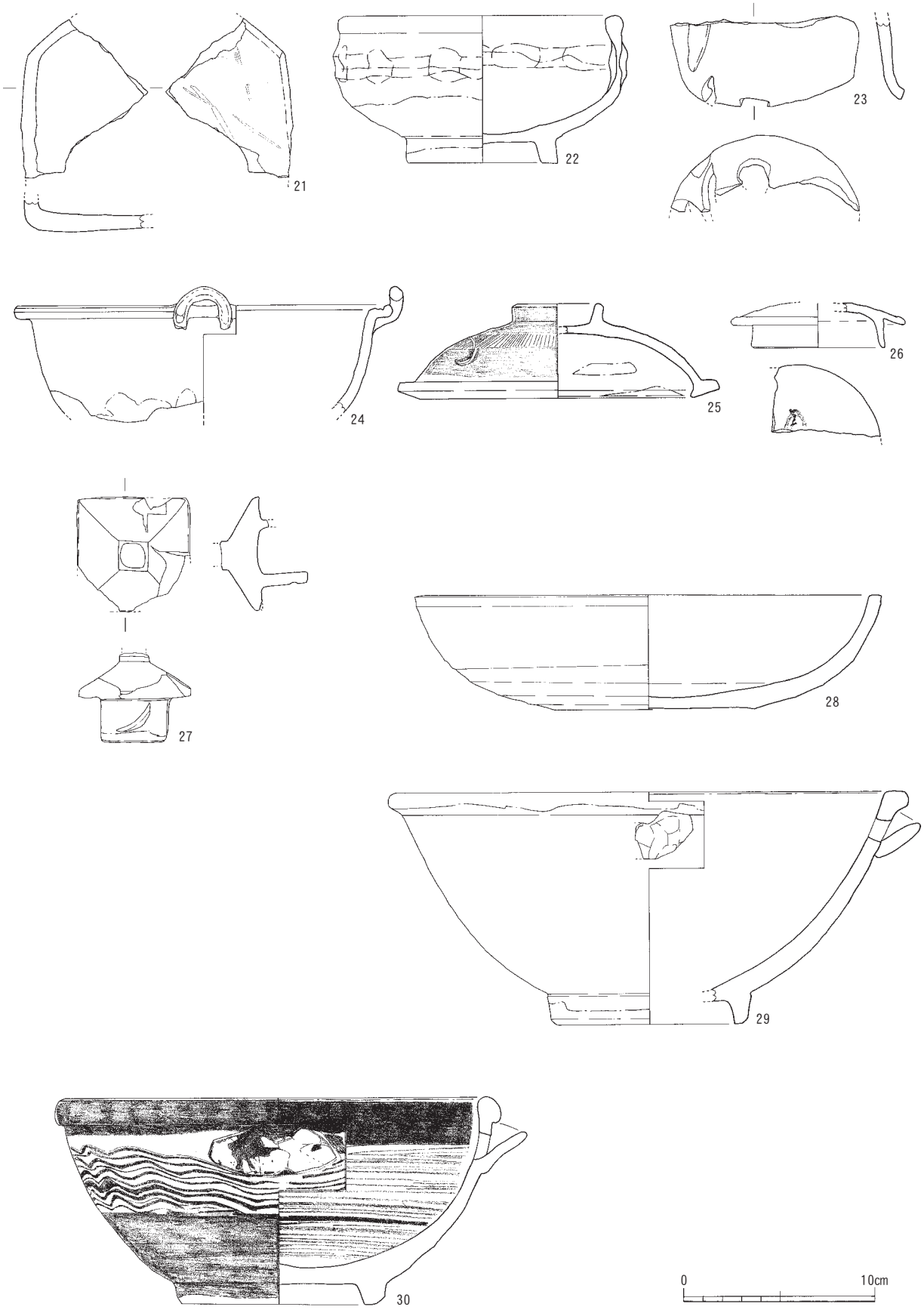


Fig.12　遺物実測図②（1/3）

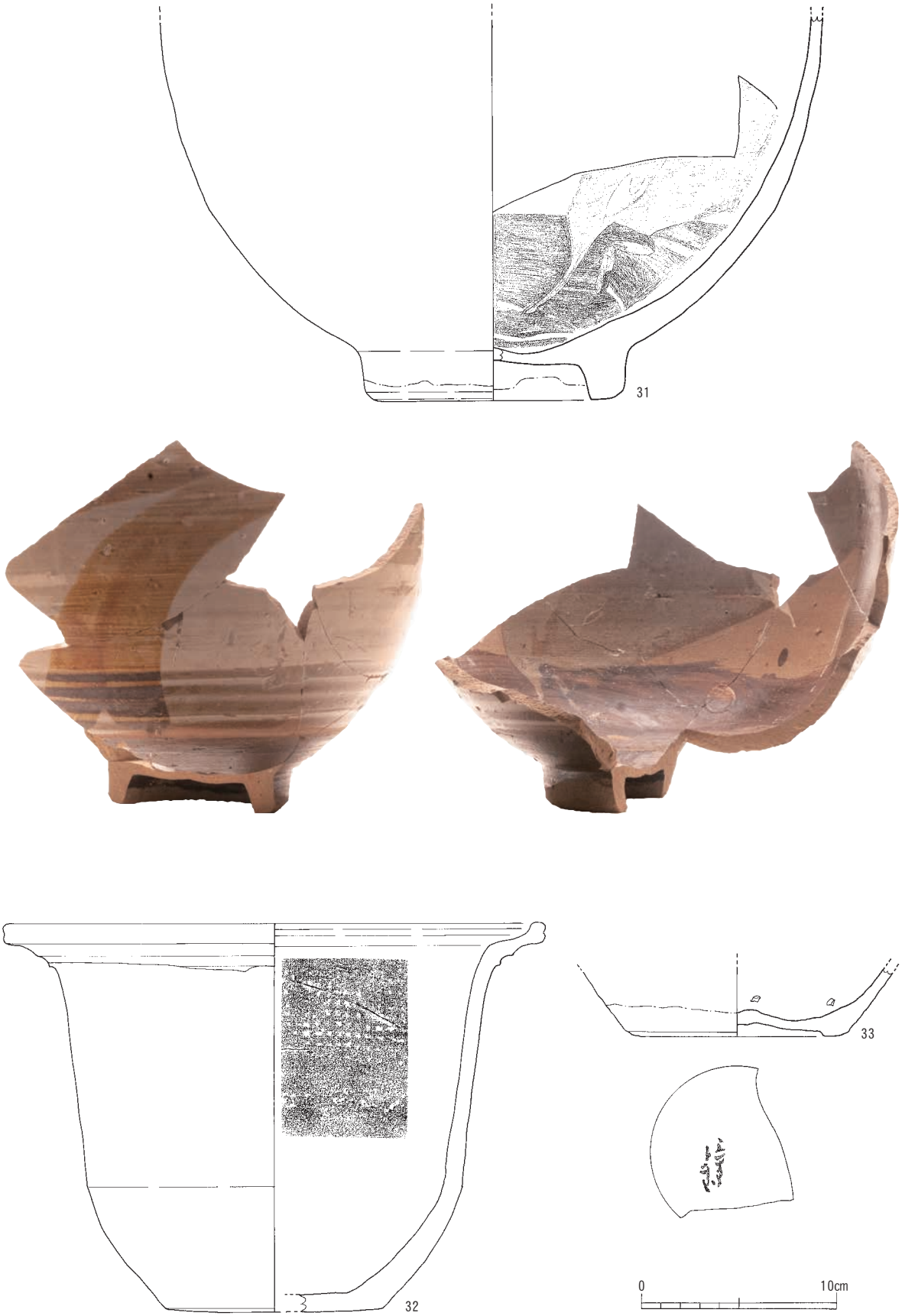


Fig.13　遺物実測図③（1/3）

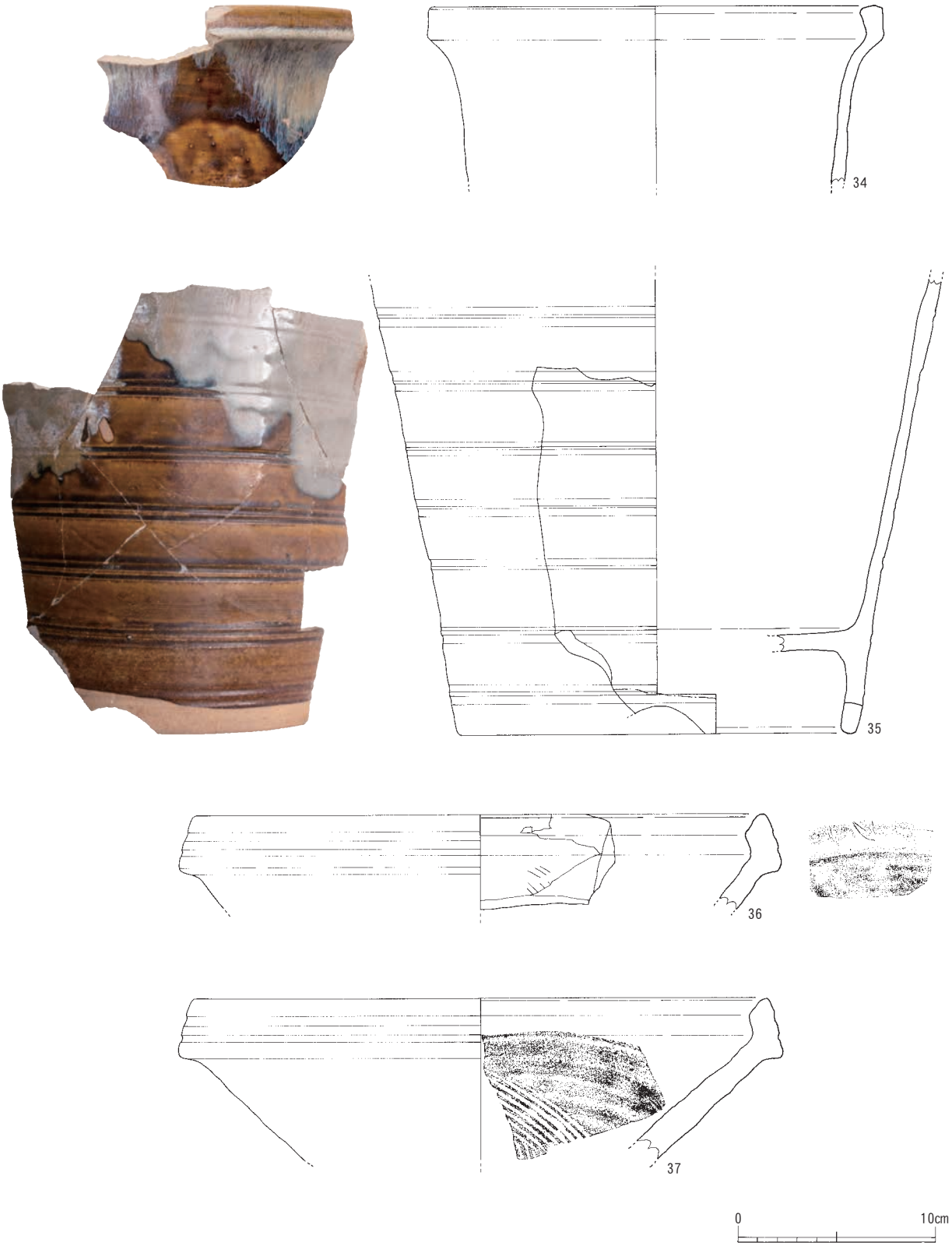


Fig.14　遺物実測図④（1/3）

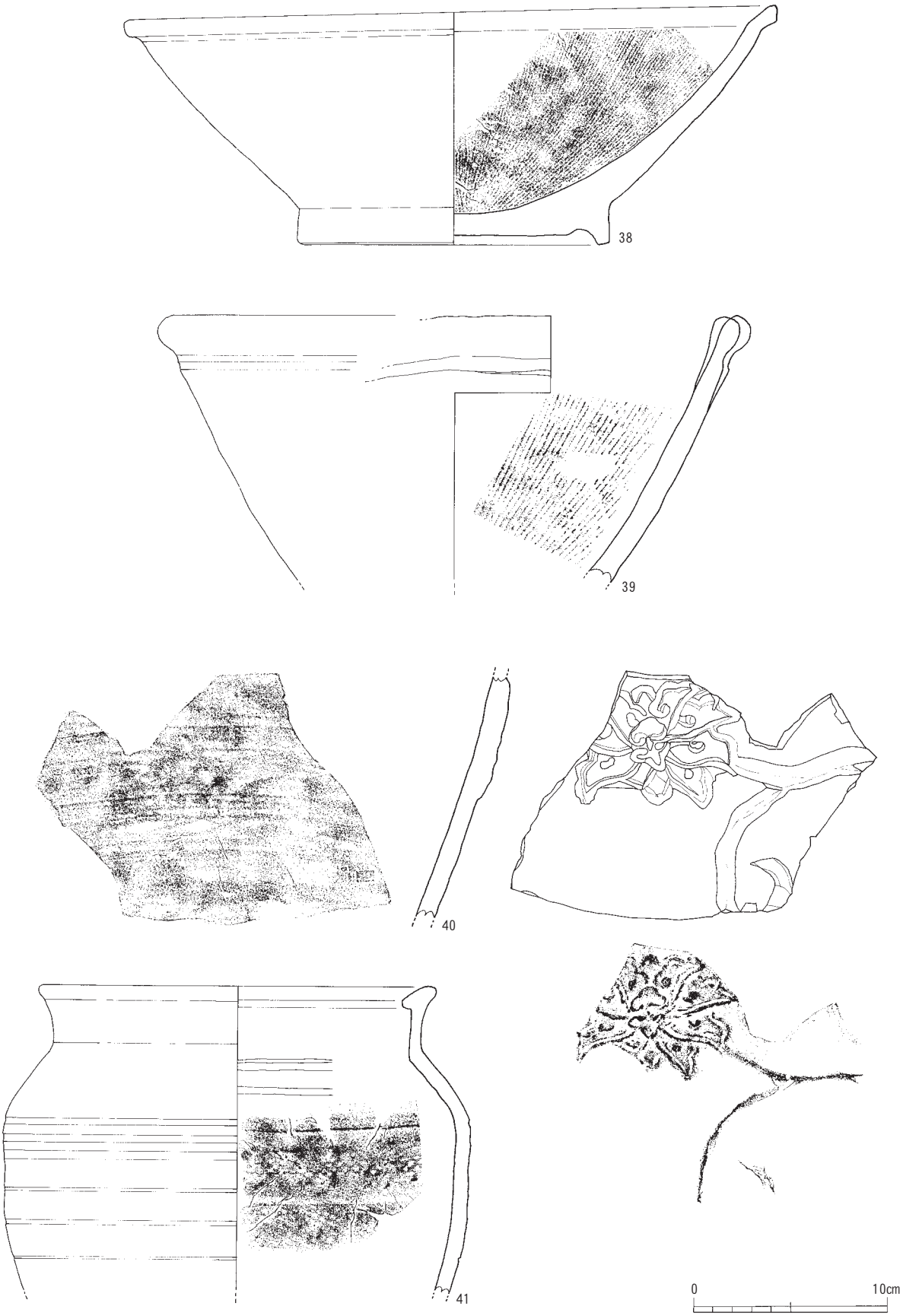


Fig.15　遺物実測図⑤（1/3）

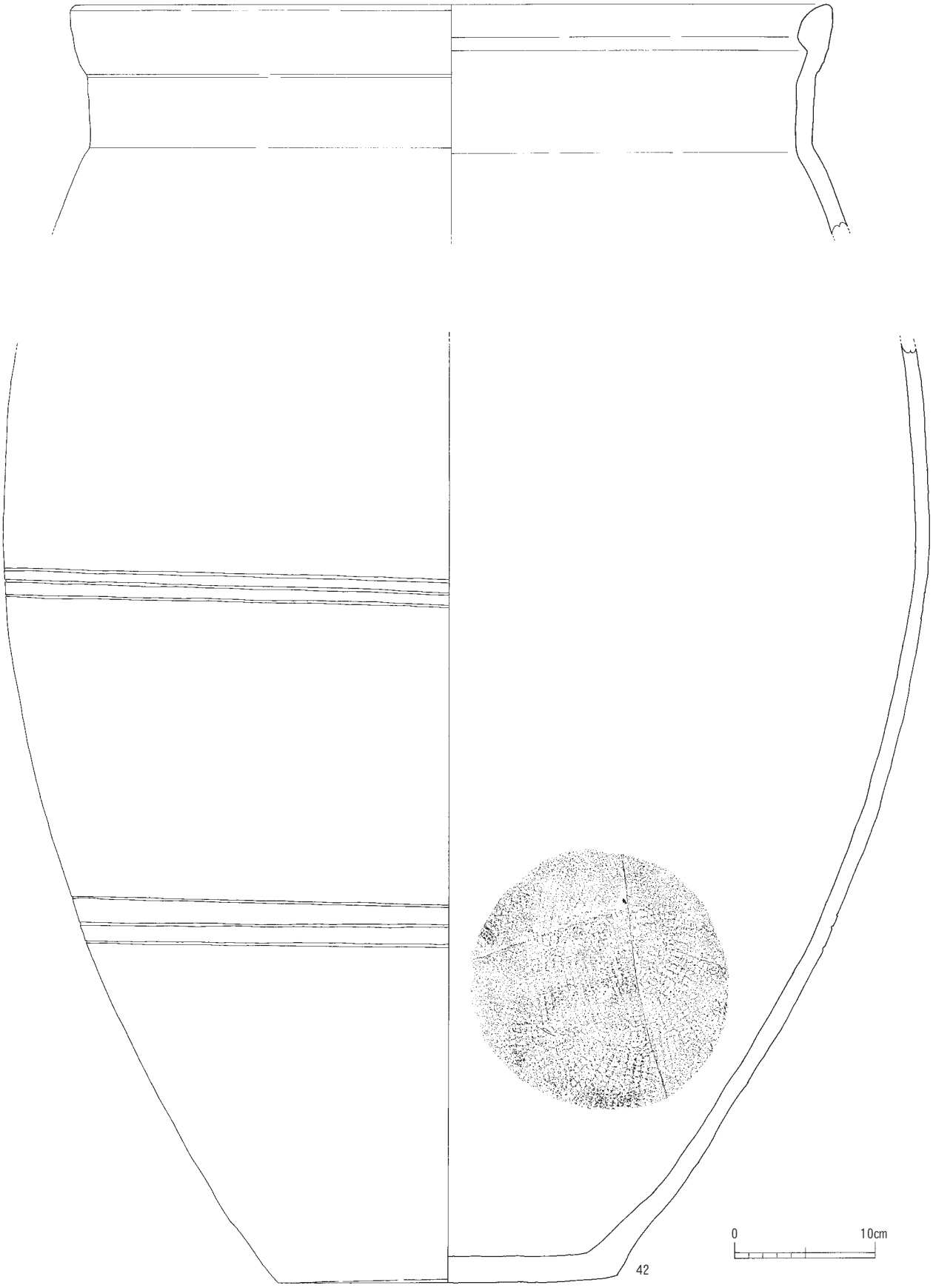


Fig.16　遺物実測図⑥（1/4）

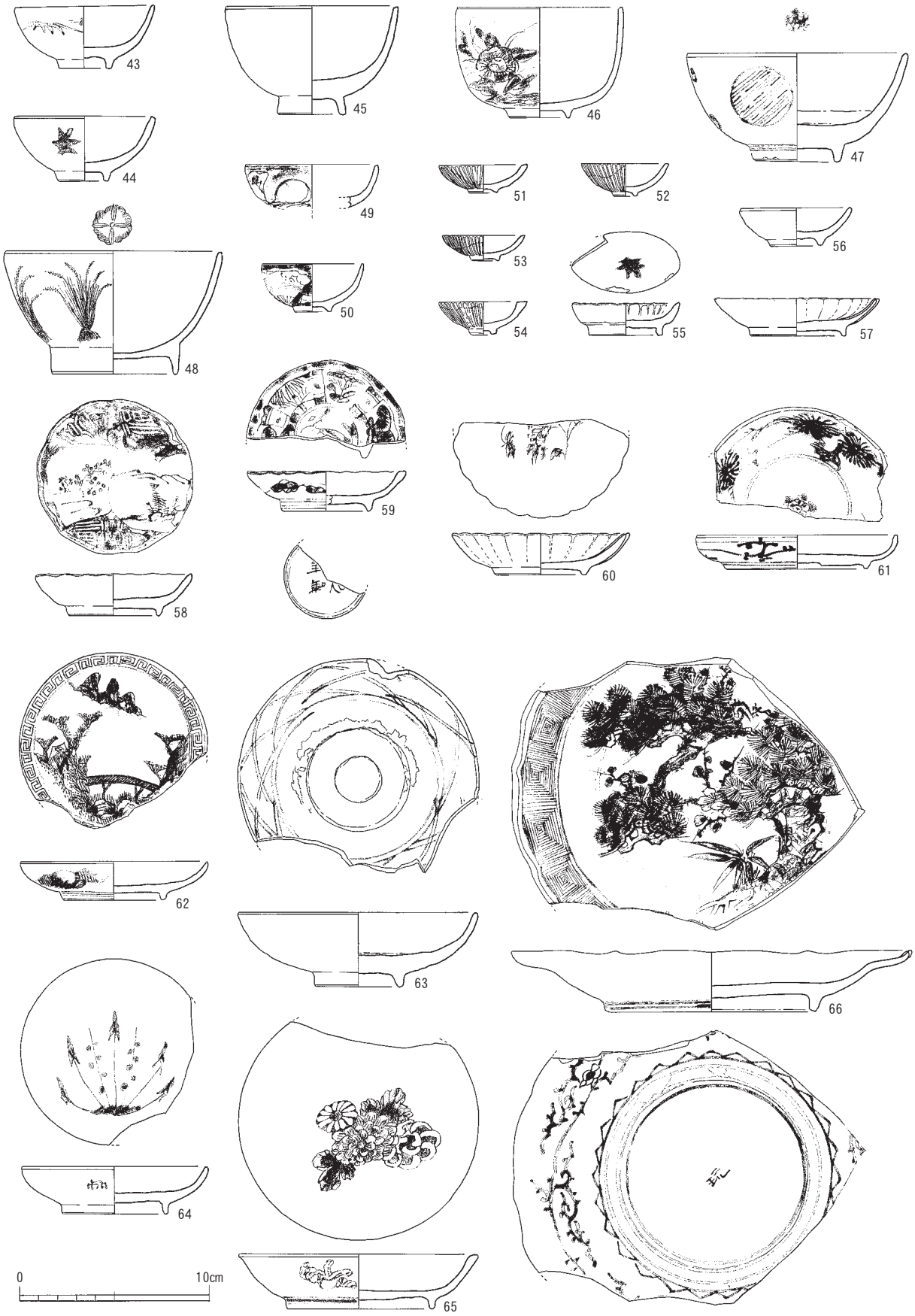


Fig.17　遺物実測図⑦（1/3）

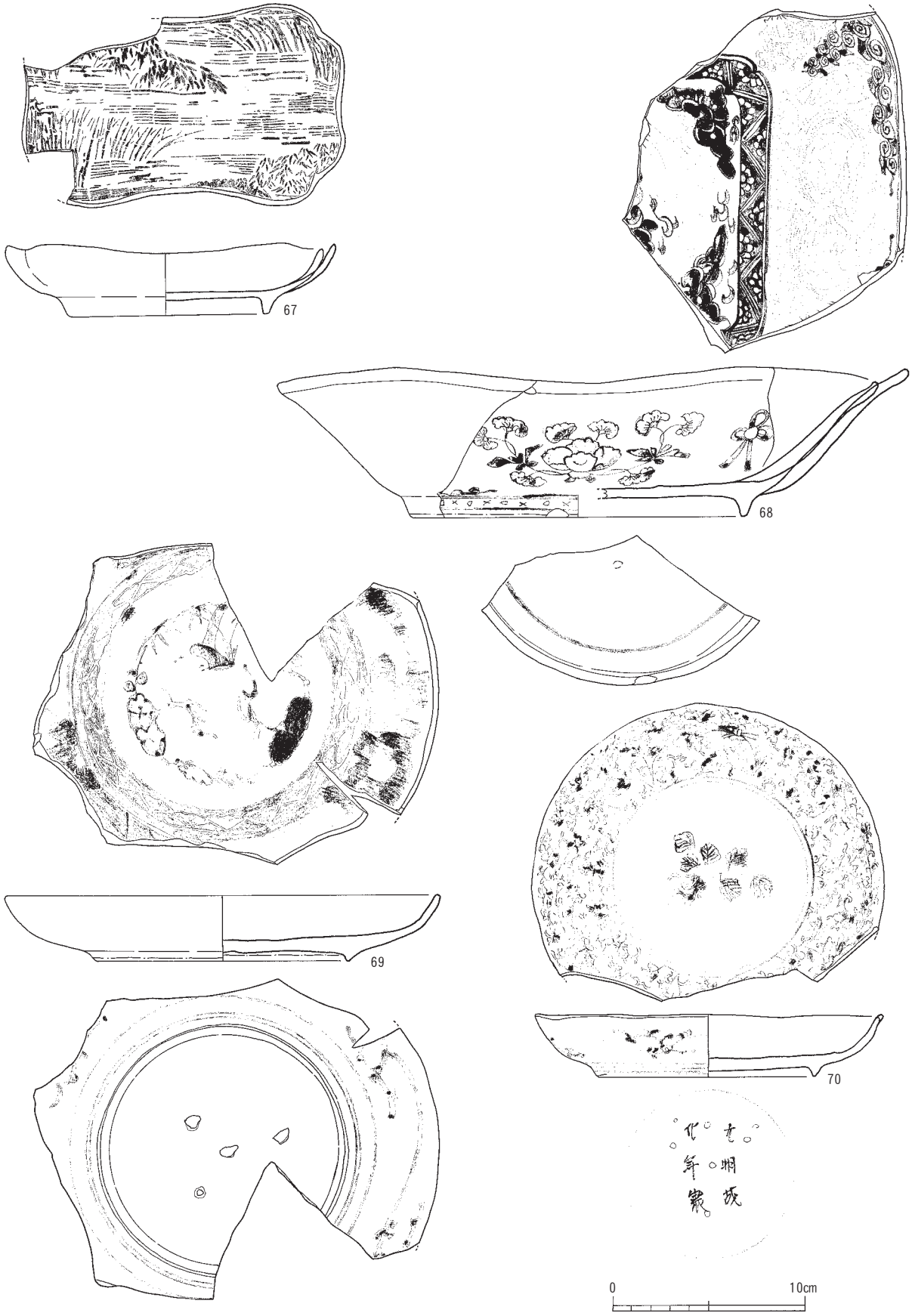


Fig.18　遺物実測図⑧（1/3）

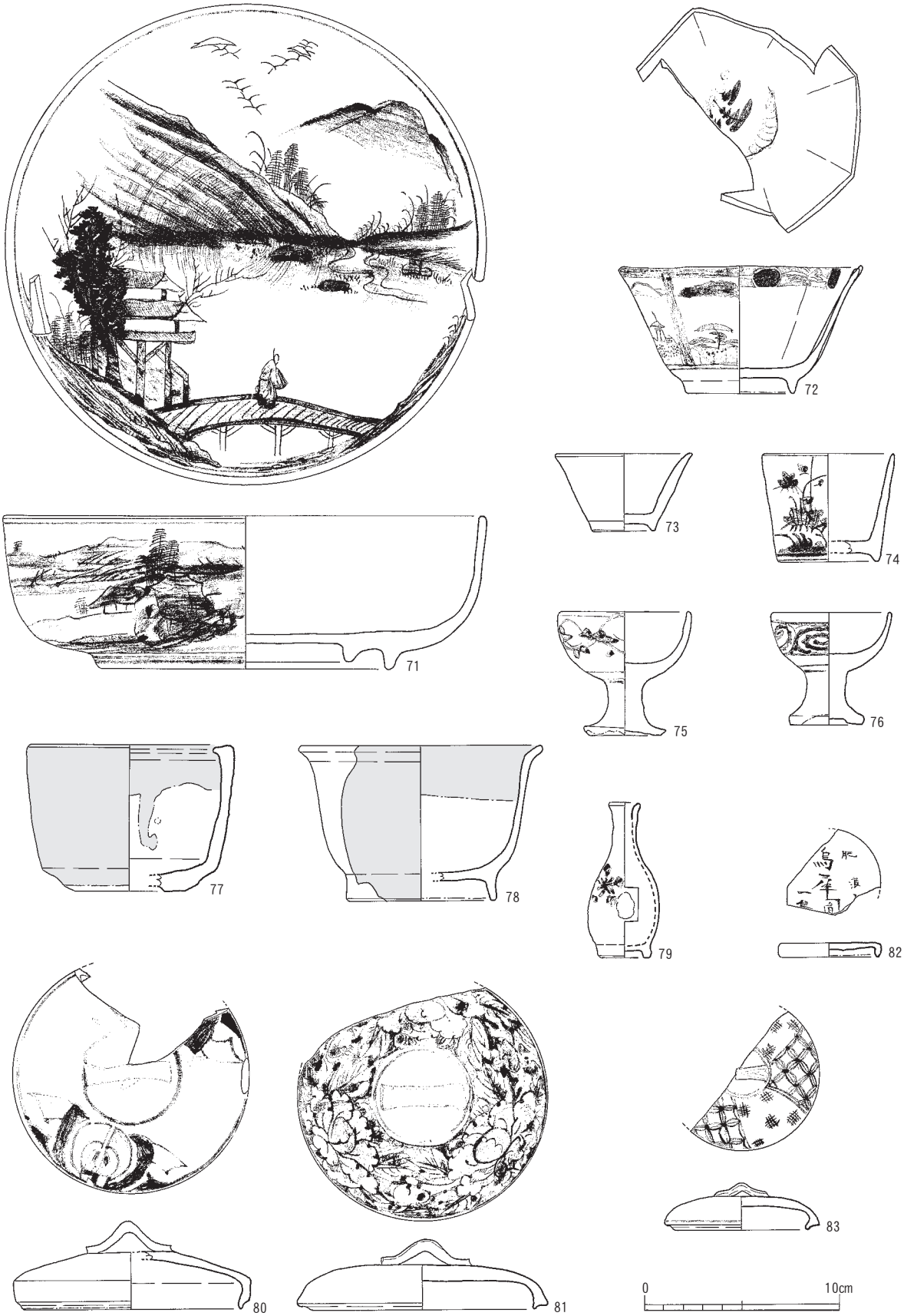


Fig.19　遺物実測図⑨（1/3）

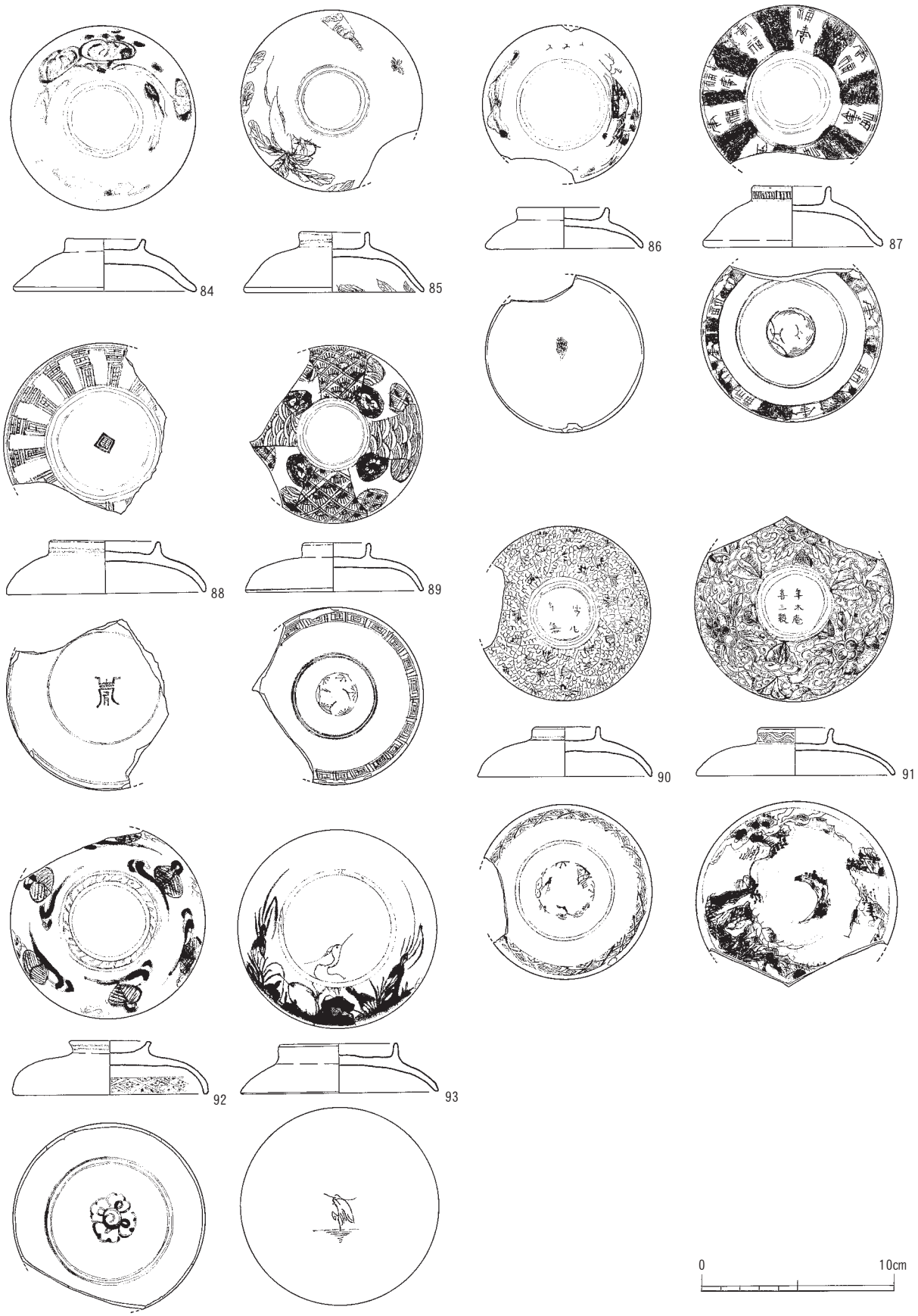


Fig.20　遺物実測図⑩（1/3）

Fig.21　遺物実測図⑪（1/3）

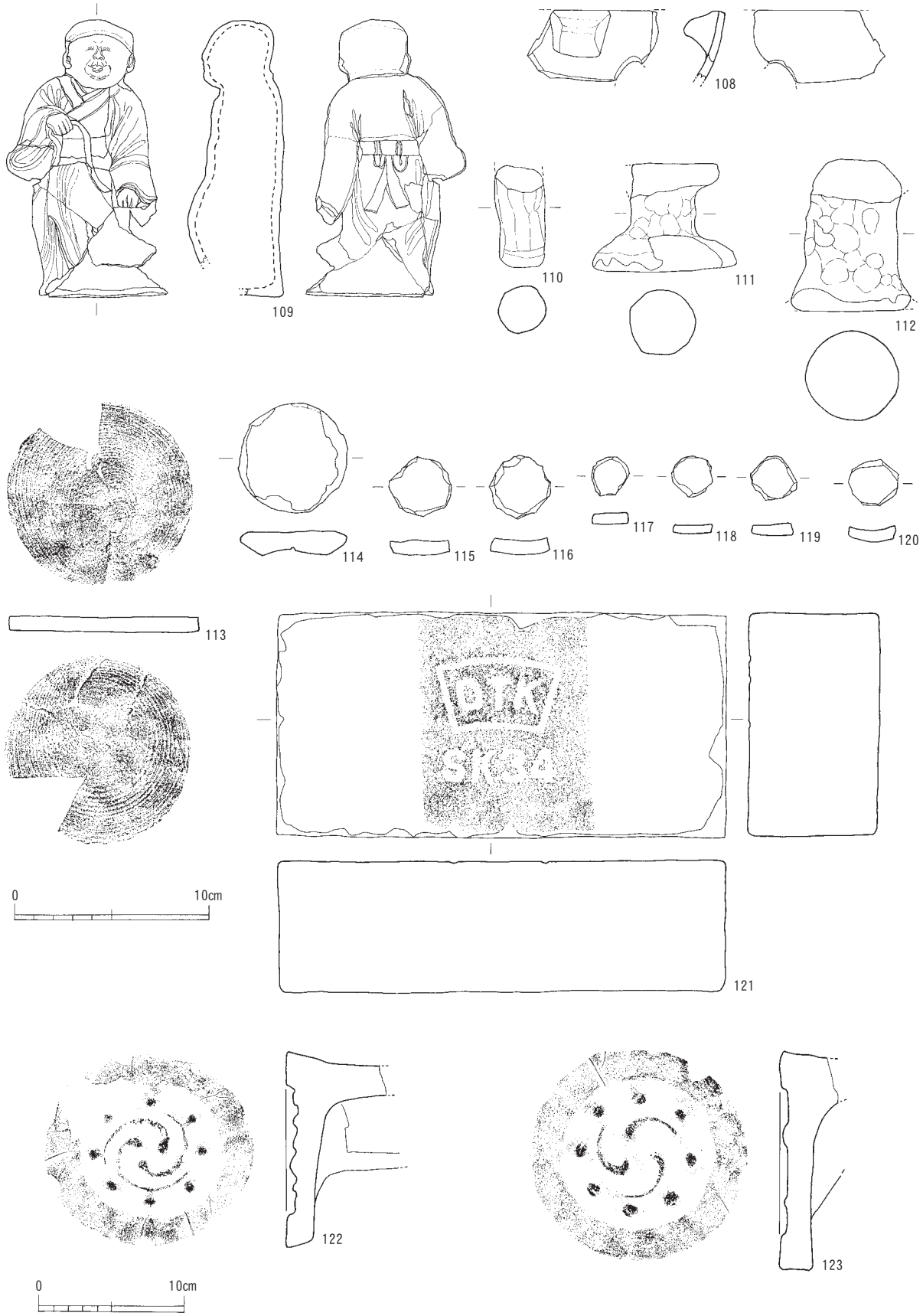


Fig.22　遺物実測図⑫（1/3、1/4）

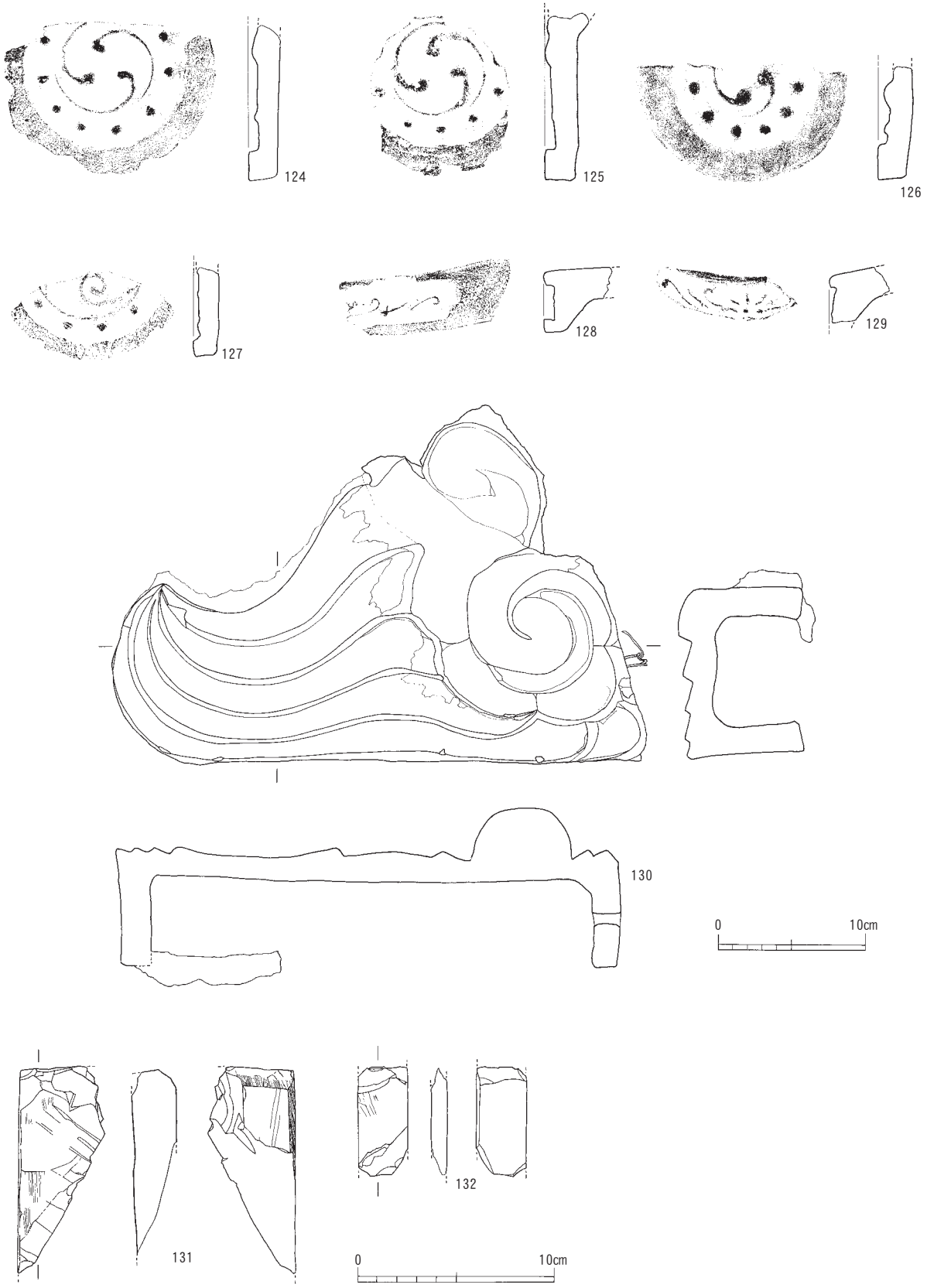


Fig.23　遺物実測図⑬（1/4、1/3）

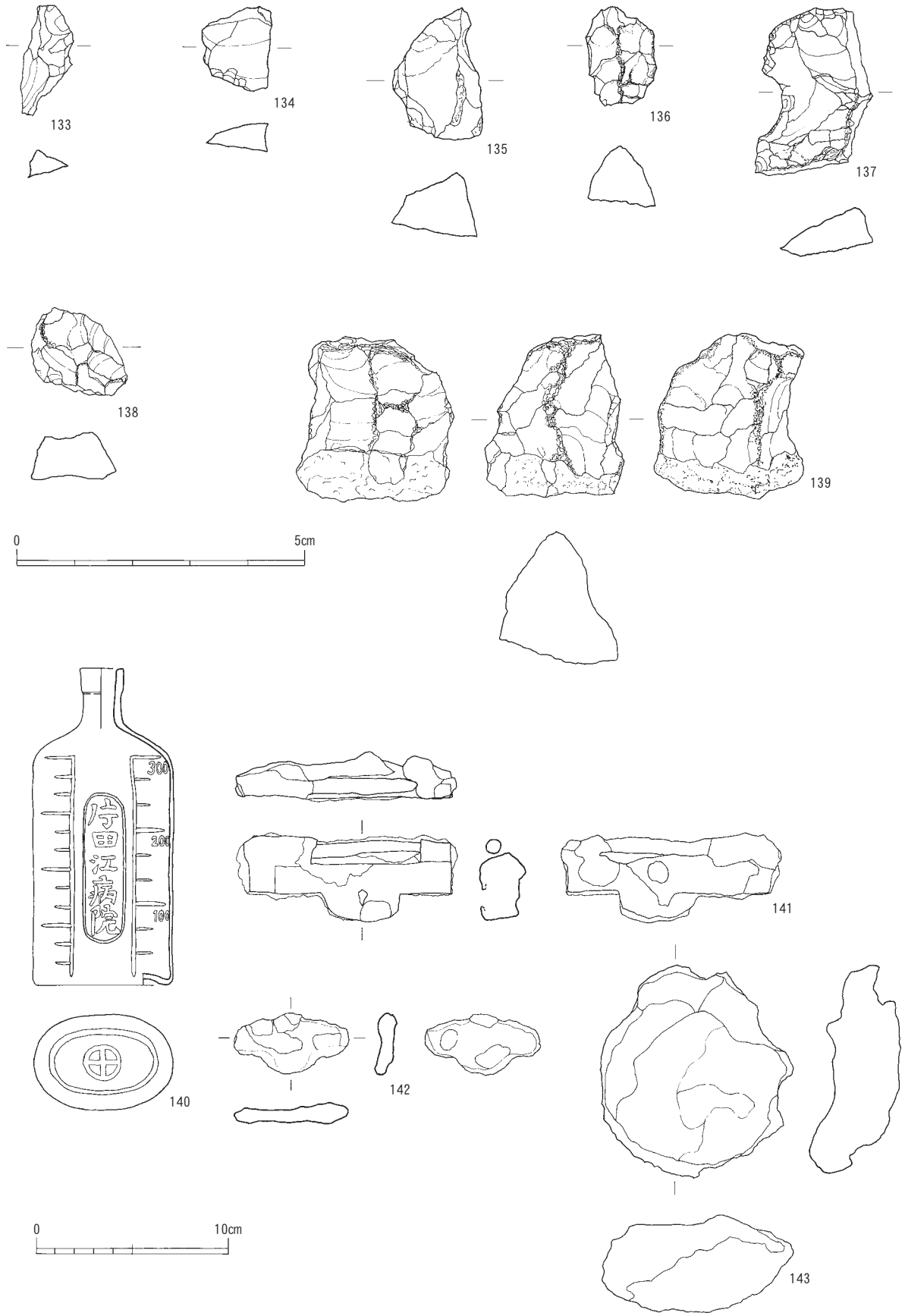


Fig.24　遺物実測図⑭（1/1、1/3）

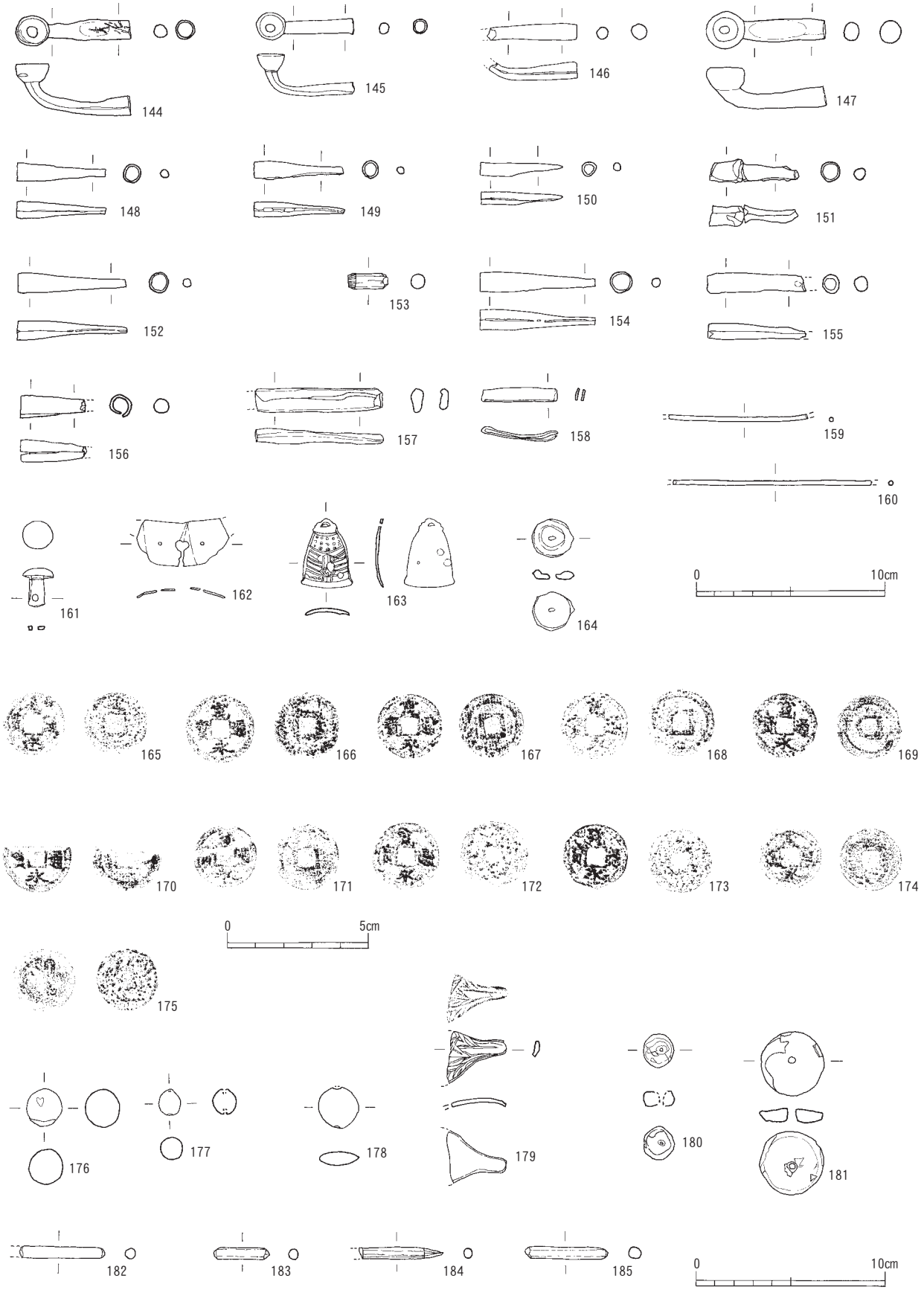


Fig.25　遺物実測図⑮（1/3、1/2）

	遺構名	地区	備考		遺構名	地区	備考
1	SD001	1B区		16	カク乱1	1B区	土層図あり
2	SK002	〃		17	カク乱2	〃	
3	SK003	1A区		18	カク乱3	〃	
4	SE004	〃	浅い石組土坑	19	カク乱4	〃	
5	SE005	〃	浅い石組土坑	20	カク乱5	〃	
6	SK006	〃		21	カク乱6	〃	
7	SK007	〃		22	カク乱7	1A区	
8	SX008	〃		23	カク乱8	〃	
9	SK009	〃		24	カク乱9	2区	ホーコクセメント印字あり
10	SK010	〃		25	カク乱10	〃	
11	SD011	2区	カク乱と判明	26	カク乱11	〃	
12	SK012	〃	調査時はSE012	27	カク乱12	3区	
13	SX013	〃	SD014上面の瓦片の集中	28	カク乱13	〃	
14	SD014	〃		29	カク乱14	〃	
15	SX015	〃	道路遺構				

Tab.２　遺構一覧表

番号	地区	器種	法量			色調	備考	実測No.
			口径	底径	器高	内（釉調）/ 外（胎土色）		
Fig.11-1	SK010No. 1	陶器碗	10.9	5.0	5.3	淡黄色/灰白色		9
Fig.11-2	2区重機深掘り，サブトレンチ1	〃	(11.1)	5.0	4.9	オリーブ黄色/灰白色	蛇の目釉剥ぎ	6
Fig.11-3	サブトレンチ１南側，サブトレンチ１中央	〃	(10.7)	5.1	5.6	淡黄色/浅黄色	〃	7
Fig.11-4	2区重機深掘り	〃	(11.7)	(5.0)	6.9	浅黄色/浅黄色	底部ヘラ切	2
Fig.11-5	サブトレンチ南側	〃	(11.1)	(4.5)	6.3	灰白色/灰白色	胎土に砂粒含む。	3
Fig.11-6	〃	〃	(10.2)	4.2	6.6	灰オリーブ色/灰白色		1
Fig.11-7	表土剥ぎ	〃	(11.2)	5.7	6.9	淡黄色/灰白色		13
Fig.11-8	サブトレンチ1 中央	〃	(9.8)	(3.4)	5.5	淡黄色/浅黄色		15
Fig.11-9	サブトレンチ2	〃	(10.5)	4.0	6.2	灰オリーブ色/にぶい橙色	底部ヘラケズリ。胎土に砂粒少量含む	12
Fig.11-10	2区重機深掘り	〃	(12.9)		(7.7)	暗灰黄色/灰白色		14
Fig.11-11	SE005 -No. 4	〃		4.1	(2.7)	灰オリーブ色/灰白色	体部にくり込み、砂粒少量含む	11
Fig.11-12	サブトレンチ1	〃	6.8		(3.3)	浅黄色/浅黄色	砂粒少量含む	10
Fig.11-13	〃	〃	(12.9)	4.2	5.4	灰オリーブ色/灰白色		4
Fig.11-14	SK007-No7	〃	(16.0)	6.2	6.4	にぶい褐色/にぶい黄橙色	蛇の目釉剥ぎ	29
Fig.11-15	SX015	陶器灯明皿	(8.1)	2.8	2.2	灰褐色/褐灰色	底部糸切り。砂目跡あり。砂粒含む	8
Fig.11-16	1区北壁	陶器皿	(8.8)	(3.9)	3.0	浅黄色/浅黄色		16
Fig.11-17	2区重機深掘り	〃	6.1		3.1	灰黄色/灰白色		31
Fig.11-18	3区表土剥ぎ	〃	10.2	4.7	2.1	淡黄色/浅黄色	目跡あり	32
Fig.11-19	表土剥ぎ	〃	(15.5)	(4.6)	4.9	黄褐色/浅黄色	〃	5
Fig.11-20	サブトレンチ1	〃	19.2	8.4	4.65	極暗赤褐色/灰白色	〃	19
Fig.12-21	サブトレンチ2	陶器不明			1.7	灰白色/浅黄色	砂粒少量含む	154
Fig.12-22	サブトレンチ1	陶器火入	(14.8)	7.8	(7.7)	赤黒色/にぶい橙色	底部ヘラケズリ。胎土に砂粒含む	20
Fig.12-23	2区重機深掘り	陶器不明品				浅黄色/浅黄色	砂粒少量含む	155
Fig.12-24	SK006	陶器鍋	19.7		5.6	暗褐色/褐灰色	〃	33
Fig.12-25	SE004	陶器蓋	(14.0)	(4.8)	(4.95)	黄色/浅黄色	受部径(16.7)	21
Fig.12-26	2区サブトレンチ3	〃	(6.9)		(2.3)	オリーブ褐色/にぶい黄橙色	内面に墨書	34
Fig.12-27	2区重機深掘り	陶器不明品	(6.0)	幅(5.9)	(4.65)	淡黄色/灰白色	底部露胎	156
Fig.12-28	No. 10	陶器鉢	24.3	10.2	6.0	赤色	目痕あり。砂粒含む	18
Fig.12-29	SX008	〃	(27.2)	(10.3)	(12.1)	暗赤褐色・灰白色/にぶい橙色	〃	25
Fig.12-30	SE005No. 1	陶器鉢(片口)	22.5	10.85	10.8	灰赤色・白灰色/橙色	砂粒少量含む	45
Fig.13-31	2区深掘り	陶器鉢		(13.3)	(19.65)	淡黄色・暗褐色/にぶい橙色	胎土に砂粒含む。砂目跡あり	24
Fig.13-32	SX015	〃	(28.0)	(11.2)	(20.0)	極暗赤褐色/淡赤橙色	胎土に砂粒含む。	22
Fig.13-33	SX015	〃		(11.4)	(3.6)	浅黄色/灰白色	墨書あり。重ね焼き痕あり	30
Fig.14-34	1区北東隅	陶器鉢か	(23.0)		(9.1)	浅黄色・黄褐色・灰白色/浅黄色		43
Fig.14-35	表土剥ぎ	〃		(20.1)	(23.0)	褐色・灰白色・浅黄色/にぶい黄褐色	高台部露胎	44
Fig.14-36	1区北東隅	陶器擂鉢	(28.7)		(4.8)	にぶい赤褐色/灰褐色	砂粒含む	23
Fig.14-37	SE005	〃	(29.1)		(8.2)	赤褐色/灰赤色・褐灰色		27
Fig.15-38	SE004	〃	33.6	16.2	12.4	暗赤褐色/橙色	高台内砂付着	28
Fig.15-39	SK012	〃	(30.65)		(13.75)	暗赤褐色/にぶい黄橙色	砂粒含む金雲母付着	148
Fig.15-40	SD014	陶器鉢か			(12.55)	にぶい黄橙色/橙色	タタキ後ナデ砂粒含む	68
Fig.15-41	SK007 - No. 6	陶器甕	(20.6)		(15.8)	灰赤色/橙色	〃	36
Fig.16-42	SX008 - N0. 1	〃	(53.7)	24.2	(84.3)	暗赤褐色・にぶい赤褐色・にぶい橙色/橙色	底面タタキ	72
Fig.17-43	サブトレンチ１中央	染付小杯	7.3	2.8	3.3	灰白色/灰白色	畳付部砂付着	174
Fig.17-44	SX015	染付小碗	(7.4)	2.7	3.4	〃		182
Fig.17-45	SK007-No. 3	白磁小碗	(9.0)	3.5	5.7	〃		151
Fig.17-46	SK003 - No. 9	染付碗	(8.7)	(3.2)	5.8	〃		181
Fig.17-47	SX015	〃	11.5	4.6	5.6	明オリーブ灰色/灰白色	蛇の目釉ハギ	184
Fig.17-48	サブトレンチ2	〃	(11.3)	6.6	6.4	灰白色/灰白色		180
Fig.17-49	SE004	色絵紅猪口	(7.0)		(2.2)	赤色・灰白色/灰白色		176
Fig.17-50	サブトレンチ2	〃	(5.3)	2.0	2.5	赤褐色・灰白色/灰白色		177
Fig.17-51	サブトレンチ2	磁器紅皿	(4.6)	1.5	1.4	灰白色/灰白色		60

Tab.３　遺物観察表（1）

番号	地区	器種	法量			色調	備考	実測No.
			口径	底径	器高	内（釉調）/ 外（胎土色）		
Fig.17-52	1区北東隅	磁器紅皿	(4.5)	(1.3)	1.7	灰白色/灰白色	砂粒少量含む	62
Fig.17-53	サブトレンチ1中央	〃	(4.3)	1.5	1.3	〃	〃	63
Fig.17-54	サブトレンチ2	〃	(4.6)	1.4	1.7	〃	〃	61
Fig.17-55	サブトレンチ2中央	磁器小皿	5.6･3.1	3.8･1.9	1.7	〃	〃	64
Fig.17-56	SX015	磁器小碗	5.8	2.7	2.0	〃		153
Fig.17-57	サブトレンチ2	磁器皿	(8.5)	5.0	2.0	明緑灰色/灰白色		59
Fig.17-58	サブトレンチ2	染付皿	8.2	4.8	2.2	明緑灰色/灰白色		108
Fig.17-59	1区北東隅	〃	8.3	4.8	2.1	〃		110
Fig.17-60	SX015	〃	(9.2)	(4.8)	2.2	灰白色/灰白色		58
Fig.17-61	2区重機深掘り	〃	(10.5)	(7.4)	1.8	〃	蛇の目高台	109
Fig.17-62	〃	〃	(9.8)	5.4	2.0	〃		107
Fig.17-63	サブトレンチ1	〃	(12.5)	4.6	3.9	明緑灰色/灰白色	蛇の目釉ハギ	55
Fig.17-64	SK003- No.3	〃	(9.7)	5.6	2.5	〃		57
Fig.17-65	2区	〃	(12.4)	7.7	2.9	灰白色/灰白色		56
Fig.17-66	SX015	〃	(20.9)	11.1	(3.2)	〃		146
Fig.18-67	2区重機深掘り	〃	長(10.5)	幅(16.7)	(3.85)	〃		172
Fig.18-68	表土剥ぎ	〃	(34.4)	(17.5)	(7.7)	〃	197集･Fig91－76接合	170
Fig.18-69	サブトレンチ１中央	〃	(22.6)	13.1	(3.45)	〃		147
Fig.18-70	サブトレンチ1	〃	18.1	11.4	3.2	明緑灰色灰白色		118
Fig.19-71	2区重機深掘り	染付鉢	24.6	15.1	7.9	〃		175
Fig.19-72	サブトレンチ2	染付角鉢	(12.6)	(5.6)	(6.55)	灰白色/灰白色		173
Fig.19-73	サブトレンチ1	染付坏	(7.0)	(3.2)	4.0	〃		152
Fig.19-74	2区重機深掘り	染付猪口	(6.7)	(5.2)	5.6	〃		183
Fig.19-75	表土剥ぎ	染付仏飯器	(6.8)	脚部径3.6	(6.35)	〃		179
Fig.19-76	サブトレンチ2	〃	(6.2)	脚部径3.7	(5.8)	〃		178
Fig.19-77	SX015深掘り	青磁火入	(10.55)	(5.7)	(7.5)	〃	内面底部砂付着	199
Fig.19-78	SX015	青磁火入	(12.6)	(7.7)	(7.95)	明緑灰色/灰白色		150
Fig.19-79	表土剥ぎ	染付	1.6	2.7	8.0	灰白色/灰白色		185
Fig.19-80	サブトレンチ2	染付蓋	11.2		4.55	〃		133
Fig.19-81	2区	〃	12.8		3.65	〃		134
Fig.19-82	サブトレンチ1東側	〃	(5.1)		(0.75)	〃		145
Fig.19-83	2区重機深掘り	〃	(6.8)		(2.4)	〃		141
Fig.20-84	サブトレンチ2	陶胎染付蓋	9.5	4.1	2.75	灰白色/にぶい橙色		144
Fig.20-85	2区検出(中央)	染付蓋	9.3	3.6	3.2	灰白色/灰白色		143
Fig.20-86	SK003.No.4	〃	8.1	4.75	2.2	〃		142
Fig.20-87	SX015	〃	9.3	4.1	3.2	〃		139
Fig.20-88	2区重機深掘り	〃	(10.4)	5.75	(2.8)	〃		140
Fig.20-89	2区検出(中央)	〃	(9.2)	3.55	2.55	〃		138
Fig.20-90	SX015	〃	9.0	3.5	2.6	〃		137
Fig.20-91	SE004	〃	10.3	3.95	2.5	〃		136
Fig.20-92	2区重機深掘り	〃	10.1	4.25	2.8	〃		135
Fig.20-93	SK007.No.2	〃	10.2	(6.2)	2.6	〃		106
Fig.21-94	SX015	弥生土器甕	(38.2)		(4.6)	灰黄褐色/橙色	外面ナデ、内面ヨコナデ。金雲母付着	47
Fig.21-95	1区北東隅	土師器皿	(10.8)	(7.35)	(1.75)	橙色/黒色	内外面ナデ。金雲母付着。赤色粒子含む	48
Fig.21-96	2区深掘り	〃	(6.2)	(4.3)	(1.1)	にぶい黄橙色/にぶい黄橙色	内外面ナデ。底部糸切り。金雲母付着	51
Fig.21-97	SK009No.1	〃	(7.55)	5.75	(1.9)	橙色/橙色	内外面回転ナデ。金雲母付着	50
Fig.21-98	1区北東隅	〃	(8.4)	5.9	(1.75)	にぶい橙色･灰褐色/にぶい橙色	内外面回転ナデ。金雲母付着	49
Fig.21-99	SX015	土師器焼塩壺	(7.2)	(5.5)	(7.9)	〃	金雲母付着。赤色粒子含む	52
Fig.21-100	カク乱6	土師器不明品	(7.4)		(6.3)	橙色/橙色	内外面回転ナデ。赤色粒子含む	53
Fig.21-101	2区重機深掘り	瓦質土器風炉	(16.9)		(10.45)	にぶい黄橙色･褐灰色/浅黄橙色	外面ハケ目	26
Fig.21-102	サブトレンチ2	瓦質土器角火鉢	長(10.0)	幅(10.2)		橙色･黒褐色/橙色	内外面ハケ目	69
Fig.21-103	サブトレンチ2	〃	長(8.5)	幅(11.9)		にぶい橙色/橙色	外面ハケ目赤色粒子含む	70
Fig.21-104	サブトレンチ1東側	瓦質土器風炉	(23.3)		(4.9)	灰褐色/オリーブ黒色		166
Fig.21-105	SX008	瓦質土器火鉢			(6.55)	明褐灰色･にぶい橙色/橙色･明褐灰色	内面剥離進む。金雲母付着、赤色粒子含む	46
Fig.21-106	SK003No.7	不明土製品	3.6	2.5	2.1	明黄褐色/浅黄色	上面に釉薬が付着する	35
Fig.21-107	SX008	〃	(4.2)	3.4	2.0	灰黄色/灰白色	〃	17
Fig.22-108	SX015東側	瓦質土器コン口			(3.7)	浅黄橙色/浅黄橙色		54
Fig.22-109	SK003No.1	土製品人形	長14.2	幅7.3	厚4.7	〃	表面に雲母	171
Fig.22-110	2区	陶製品人形	長(5.35)			にぶい赤褐色･黒色/褐灰色		67
Fig.22-111	1区北東隅	土製品陶枕	長(5.6)	幅(7.4)		灰赤色/橙色	金雲母含む	158
Fig.22-112	表土剥ぎ	〃	長(7.8)	幅(6.2)		にぶい赤褐色	指頭圧痕あり	157
Fig.22-113	IA区遺構検出一括	陶器不明品	長9.7	幅9.75	厚0.8	橙色/橙色	上下面糸切り	66
Fig.22-114	SX015	不明土製品	長5.6	幅5.65	厚1.2	にぶい橙色/橙色		65
Fig.22-115	2区深掘り	円盤形土製品	長3.1	幅3.2	厚0.8	オリーブ褐色/灰黄色		37
Fig.22-116	サブトレンチ1東側	〃	長3.3	幅3.15	厚0.7	暗赤褐色/にぶい黄橙色		38
Fig.22-117	サブトレンチ１中央	〃	長2.0	幅1.9	厚0.55	にぶい赤褐色･灰黄褐色･浅黄橙色/灰黄褐色		41
Fig.22-118	サブトレンチ1東側	〃	長2.1	幅2.1	厚0.45	灰白色/にぶい黄橙色		42
Fig.22-119	サブトレンチ１中央	〃	長2.3	幅2.4	厚0.65	灰白色･浅黄色/にぶい黄色		40
Fig.22-120	〃	〃	長2.4	幅2.6	厚0.65	オリーブ灰色/灰白色		39
Fig.22-121	表土剥ぎ	煉瓦	長11.6	幅23.1		橙色/にぶい黄橙色		71
Fig.23-131	IA区遺構検出一括	石製品砥石	長(10.35)	幅(4.4)	厚2.3	浅黄色		104
Fig.23-132	2区深掘り	〃	長(5.6)	幅2.5	厚0.85	〃		105
Fig.24-133	SD011	火打石	長1.9	幅0.9	厚0.9	材質：チャート	重さ：0.7ｇ	112
Fig.24-134	サブトレンチ2	〃	長1.45	幅1.2	厚0.5	〃	重さ：0.9ｇ	115
Fig.24-135	SX008	〃	長2.3	幅1.5	厚1.1	〃	重さ：4.7ｇ	113

Tab.4　遺物観察表（2）

番号	地区	器種	法量			色調	備考	実測No.
			口径	底径	器高	内（釉調）/ 外（胎土色）		
Fig.24-136	SX008	火打石	長1.7	幅1.1	厚1.0	材質：チャート	重さ：2.0ｇ	114
Fig.24-137	表土剥ぎ	〃	長2.9	幅1.8	厚0.9	〃	重さ：5.1ｇ	111
Fig.24-138	サブトレンチ2	〃	長1.5	幅1.6	厚0.8	〃	重さ：2.5ｇ	116
Fig.24-139	カク乱7	〃	長2.8	幅2.4	厚2.5	材質：石英	重さ：17.5ｇ	117
Fig.24-140	〃	ガラス製品薬瓶	2.3	7.2	16.45			159
Fig.24-141	SK012	鉄製品錠前	長4.6	幅11.4	厚2.4	にぶい赤褐色・明褐色		121
Fig.24-142	サブトレンチ1	鉄製品不明品	長3.2	幅6.0	厚1.05	にぶい褐色・にぶい黄橙色		120
Fig.24-143	SD014	鉄滓	長11.0	幅9.9	厚3.7	にぶい赤褐色・橙色		119
Fig.25-144	表土剥ぎ	青銅製品煙管	長6.05	幅1.6	厚1.0			73
Fig.25-145	2区重機深掘り	〃	長5.1	幅1.45	厚0.7			75
Fig.25-146	サブトレンチ1南側	〃	長(4.75)	幅0.9	厚0.85			78
Fig.25-147	SD004	〃	長6.25	幅2.0	厚1.2			74
Fig.25-148	サブトレンチ１中央	〃	長4.7	幅1.0	厚0.95			81
Fig.25-149	SK003	〃	長4.8	幅1.0	厚0.9			83
Fig.25-150	表土剥ぎ	〃	長4.35	幅0.7	厚0.7			84
Fig.25-151	サブトレンチ2	〃	長4.7	幅1.2	厚1.05			76
Fig.25-152	サブトレンチ１中央	〃	長5.75	幅1.1	厚1.1			80
Fig.25-153	2区深掘り	木製品ラウ	長2.2	幅0.8	厚0.75			87
Fig.25-154	〃	青銅製品煙管	長6.1	幅1.1	厚1.1			79
Fig.25-155	SK010	〃	長(5.2)	幅1.05	厚1.0			77
Fig.25-156	サブトレンチ1	〃	長(3.4)	幅1.1	厚1.15			82
Fig.25-157	SK007	青銅製品柄	長6.7	幅1.2	厚0.7			88
Fig.25-158	2区深掘り	青銅製品	長4.0	幅0.7	厚0.1			86
Fig.25-159	SE004	〃	長(7.3)	幅0.25	厚0.25			92
Fig.25-160	〃	〃	長(9.95)	幅0.25	厚0.25			91
Fig.25-161	SD014	〃	長2.1	幅1.6	厚0.2			90
Fig.25-162	SK012	〃	長(4.95)	幅2.35	厚0.05			89
Fig.25-163	表土剥ぎ	青銅製不明品	長3.65	幅2.65	厚0.15			85
Fig.25-164	IA区遺構検出一括	雁首銭	長2.0	幅2.15	厚0.5			99
Fig.25-165	遺構検出	銅銭	長2.2	幅2.2	厚0.1			125
Fig.25-166	サブトレンチ2	〃	長2.4	幅2.4	厚0.15			126
Fig.25-167	SE005	〃	長2.3	幅2.25	厚0.15			127
Fig.25-168	SE004	〃	長2.35	幅2.35	厚0.1			129
Fig.25-169	SD014	〃	長2.3	幅2.3	厚0.15			132
Fig.25-170	2区深掘り	〃	長(1.6)	幅2.3	厚0.1			124
Fig.25-171	表土剥ぎ	〃	長2.2	幅2.2	厚0.1			122
Fig.25-172	サブトレンチ１中央	〃	長2.4	幅2.4	厚0.15			128
Fig.25-173	SD014	〃	長2.3	幅2.25	厚0.1			130
Fig.25-174	〃	〃	長2.2	幅2.2	厚0.1			131
Fig.25-175	表土剥ぎ	〃	長2.2	幅2.2	厚1.5			123
Fig.25-176	SK10	鉄砲弾	長2.0	幅1.85	厚2.0			94
Fig.25-177	2区	〃	長1.4	幅1.2	厚1.4			95
Fig.25-178	表土剥ぎ	碁石	長(2.2)	幅2.1	厚0.65			96
Fig.25-179	サブトレンチ2	匙	長(3.15)	幅(2.8)	厚0.25		型作り、何製か不明	93
Fig.25-180	礎石トレンチンチ2	土製品？	長1.75	幅1.6	厚0.8	にぶい黄橙色・緑灰色	砂粒少量含む。片側穿孔	97
Fig.25-181	サブトレンチ2	不明土製品	長3.35	幅3.35	厚0.75	にぶい褐色・橙色・灰白色	砂粒少量含む。漆喰付着	98
Fig.25-182	SX015	チョーク	長(4.45)	幅0.6	厚0.6	にぶい橙色		100
Fig.25-183	サブトレンチ1南側	〃	長2.9	幅0.6	厚0.6	黄灰色		103
Fig.25-184	表土剥ぎ	〃	長(4.4)	幅0.6	厚0.6	灰白色		102
Fig.25-185	SX015	〃	長4.35	幅0.6	厚0.6	褐灰色		101

Tab.5　遺物観察表（3）

番号	出土地点	器種	法量								胎土	瓦当文様	実測No.
			a	b	c	d	e	f	g	h			
Fig.22-122	2区重機深掘り	軒丸瓦	13.5	9.0	5.5	1.0	(7.8)	1.9	0.7	2.0	砂粒含む	巴左8	160
Fig.22-123	SD011	〃	15.1	10.4	5.7	1.1	(4.2)	2.3	0.55		〃	巴右8	161
Fig.23-124	表土剥ぎ	〃	(10.6)	(8.6)	6.0	1.0	(2.2)	1.9	0.7		〃	巴右11？	163
Fig.23-125	2区重機深掘り	〃	(11.9)	(9.25)	6.6	0.95	(3.0)	2.1	0.75		〃	〃	164
Fig.23-126	SX015	〃	(7.7)	(5.35)	(3.2)	1.1	(2.4)	1.9	0.5		〃	〃	162
Fig.23-127	SD014	〃	(6.05)	(5.05)		0.8	(1.7)	1.6	0.95		〃		165
Fig.23-128	SX015	軒平瓦	(11.9)	(8.4)	4.1	2.3	(4.7)	1.3	0.8		〃		168
Fig.23-129	1区北東隅	〃		(9.6)	(3.1)	(2.4)	(9.1)		0.4		〃		167
Fig.23-130	SK002	鬼瓦	長（24.2）		幅（35.0）		厚（10.9）				〃		169

Tab.6　遺物観察表（4）

第Ⅴ章　まとめ

第１節　遺構について

（１）上面の調査について

礎石列は唐津市教育委員会が所蔵している掛軸の図面（Fig.26）との比較により、唐津小学校の礎石列と考えたが、絵図面は略図であるため、現状の測量図とは違いもある。特に敷地境が大きく異なっていることから、大よその位置を合わせた（Fig.27）（註1）。

図面では教室の仕切りの位置には柱列があることになっているが、実際は床を支える束柱列もあったようで、調査では南北方向の礎石列のすぐ隣にも、礎石下に敷かれた栗石が詰め込まれたごく浅い掘り込みの列が確認された。同じ列には浅い掘り込みだけになった箇所もあり、調査で確認された浅い掘り込み以外にも柱列はあったものと思われる。礎石を支える構造は、地面を掘り窪めて粗砂や円礫を敷き詰めて、沈み込みを防ぐ対策がみられたものが多かった。また南端の礎石列周辺では一部に漆喰の残存が認められるため、床下に関わる何らかの構造物があったものと思われる。

（２）下面の調査について

下面の中心的な遺構は道路状遺構SX015である。SX015は、廃絶後の改変が認められないことから、小学校建設時までは利用されていたようである。一つの面は数ミリ～数センチで数面にわたり、粘土と直径５ミリ以下の砂礫が混じった土が、叩き締められたように硬化した層である。路面の層と層の間には褐色砂質土（花崗岩バイラン土）が敷かれている。発見位置的に屋敷間を通る道路の位置にあたり、複数回にわたり道路の手直しが行われていることが分かる。ただし硬化した粘土が路面として維持できるのか？という疑問が残る。

他地域の事例をあまり調べることはできなかったが、武家屋敷間の道路について、『吉田城址（Ⅴ）』（豊橋市教育委員会、2002）で発見された道路跡では、平坦に造成した地山に川原石を敷き詰め、その上部を粘質土で固め、その上層に敷かれた固く締まった砂が路面となっている。唐津市域では、道路状遺構の調査事例として数遺跡知られている。馬部甚造山遺跡では、道路路面と並行する溝が調査されている。路面には小礫が敷かれており、並行する溝路肩には礫が並べられている。唐津城跡内に関しては、校舎建設に伴う発掘調査で石段が見つかっているが、路面の構造が分かるものは知られていない。吉田城址の調査事例から見ると、今回発見された道路状遺構の上面にも砂が敷かれていた可能性もがあるが、その痕跡も含めて調査では確認できなかった（註２）。

第２節　遺物について

今回の出土品のほとんどは、近世後半以降の陶磁器である。遺存状態も悪く、小破片のものが多かった。また唐津小学校に関わる遺物の出土もほとんどなかった。小学校の時代にはゴミ穴を掘ってのごみ処理は行っていなかったようである。その中で大型の鬼瓦は小学校に関わる資料と思われる。Fig.24-142の錠前は当初錆に覆われていたが、錆落としの結果、完形であることが分かった。

今回出土したものの中で、最も注目すべきものはFig.23-127の蕨手三つ巴文軒丸瓦である。これまでに類例として知られている瓦は、熊本県天草市河内浦城跡と熊本県苓北町富岡城跡から出土したものだけであり、この軒丸瓦は天草で作られたものと考えられている。天草以外では初出土である。天草は唐

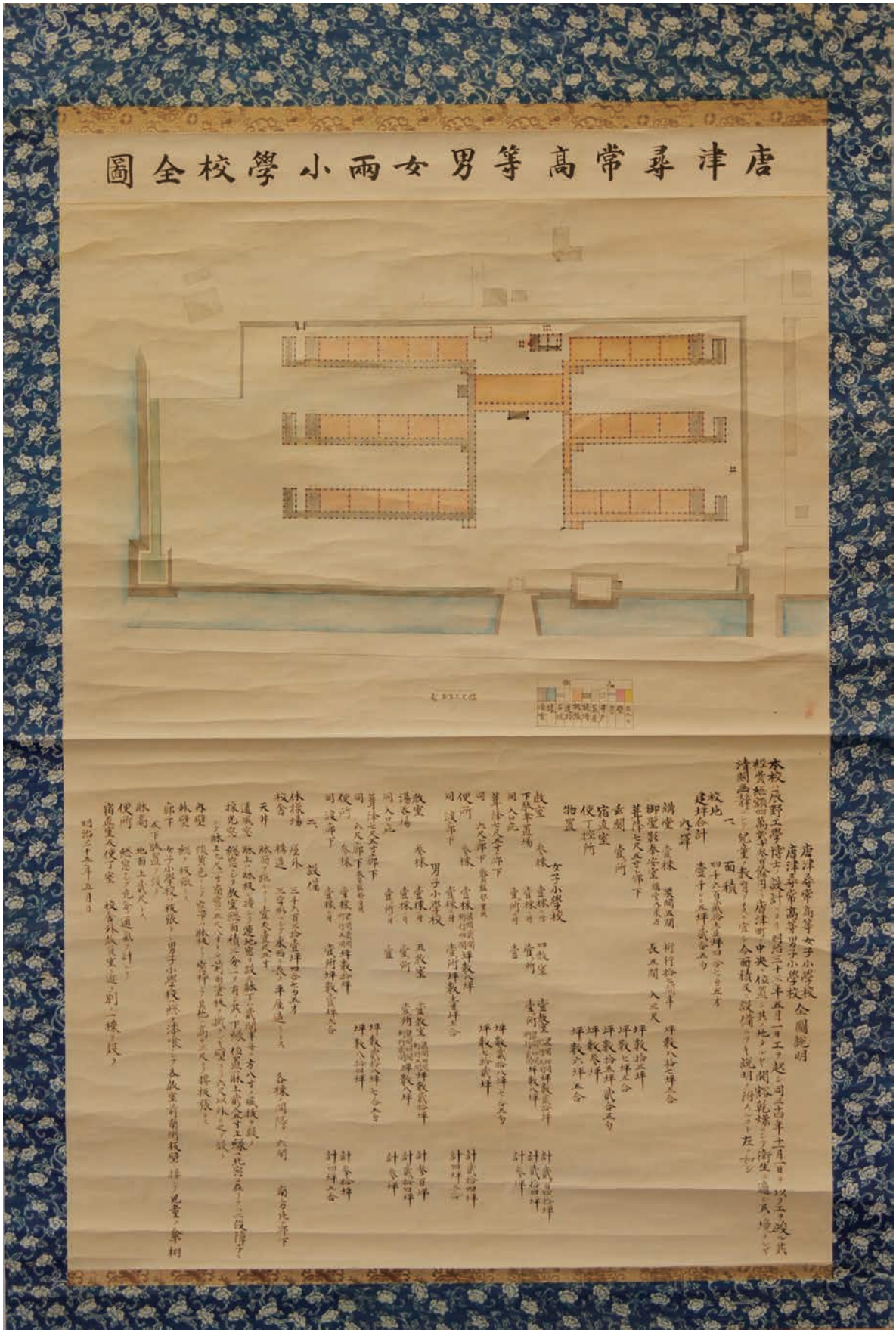


Fig.26　唐津小学校全図掛軸

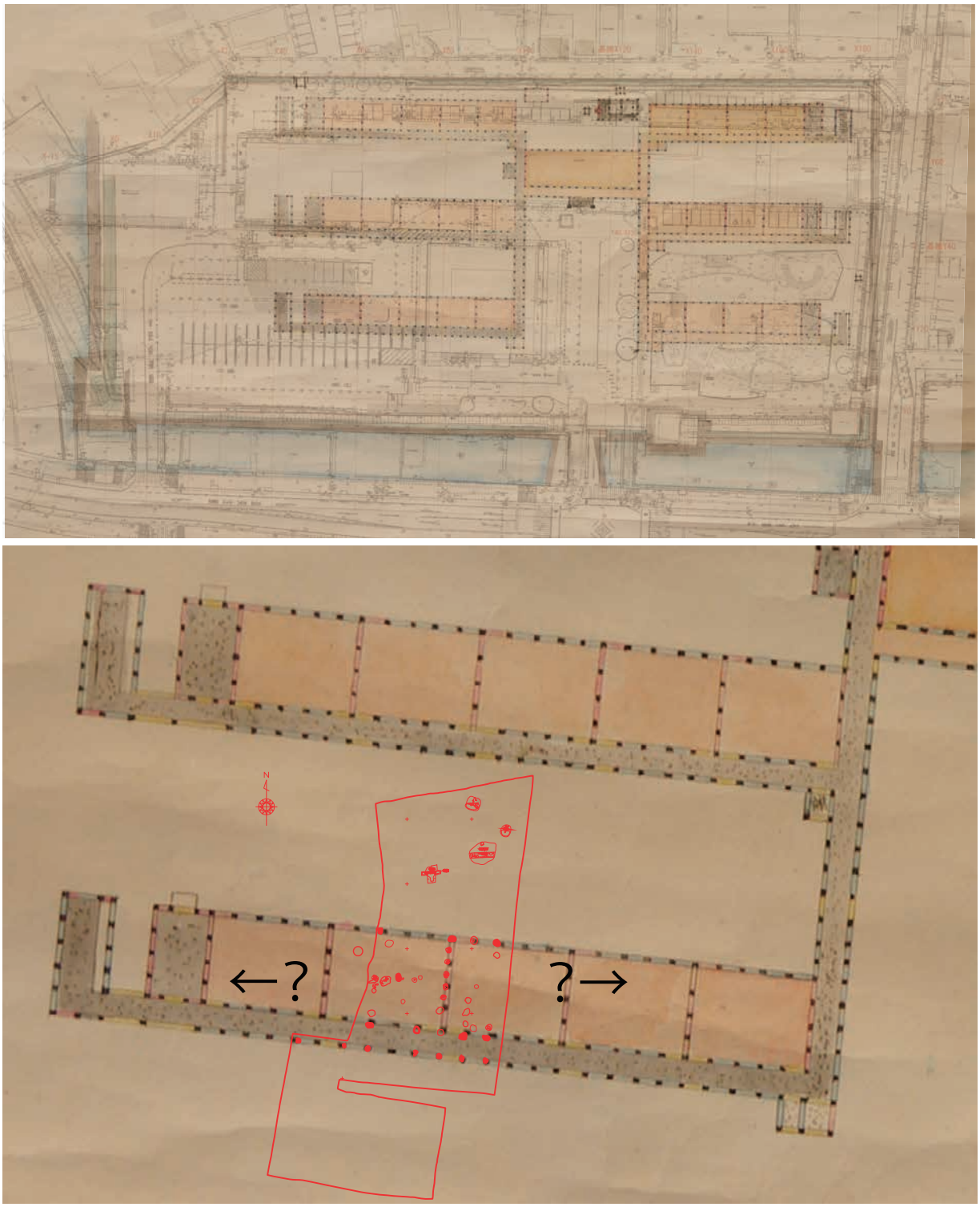


Fig.27　校舎と市役所平面図及び調査区合成図

Fig.28　唐津城下絵図と明治14年測量図

Fig.29　唐津城下絵図と明治14年測量図及び調査区合成図

津藩初代藩主寺澤氏が治めていた地域であり、これまでのところ、唐津市域の出土遺物では唯一、天草との直接つながりを示す資料である（註３）（天草市立天草キリシタン館、2020）。

また火打石も多く見つかったことも注目すべきである。これは一部の遺構検出の際に小礫まで含めて取り上げを行い、遺物の水洗を行った成果である。ほとんどは徳島県阿南市大田井産のチャート小片であったが、１点見つかった石英製の火打石は、市内で初めて出土したものである。石英は花崗岩の構成鉱物であり、市域でも普通に見られることから、地元で流通していた火打石の可能性がある。唐津市域における発火具については、これまであまり注目されてこなかったが、遠方の産地から持ち込まれた火打石も見つかることから、今後は研究を進める必要がある。

今回の調査は不十分なものにならざるを得なかったことは、大きな反省点である。特に道路面の下部構造についての所見を得ることができなかったことは大きい。最後になりましたが、調査前から協議・調整に携わった総務課の職員の皆様、調査及び整理作業に従事していただいた発掘作業員並びに整理員の皆様に御礼申し上げます、

註

１：今回提示した位置関係は、市役所の測量図と掛軸の略図の敷地の横幅で大よそ合わせたものである。合わせ方によっては、一教室分程度ずれる可能性もある。これは掛軸の小学校敷地は略長方形に描かれているのに対して、実際は異なるためである。

２：京都大学構内の調査では粘土面が路面となっている例は認められない（伊藤、2020）。伊藤氏の論文によると、京都大学周辺では道路面としては、礫敷き、礫混じりの土や砂質土及び粗砂のものがあるとされる。SX015は大型の礫が混じっておらず、粗砂が少量混じる粘質土である。路面の造作は、道路を通る人やモノの質や量によりおおよそ決まるものと思われ、SX015は中級武家の屋敷地間を通る道路であることから、多くの人や物が行き交う道ではないことが影響している可能性もある。

３：この他、平成28～29年度に唐津保健福祉事務所（唐津市大名小路）の建替えに伴う発掘調査において、「丸に三つ引き両」の家紋瓦が出土した。この家紋は唐津藩の重臣クラスでは、報告書段階で原田家が該当することは知ることができたが、天草市教育委員会の中山氏から三宅家も同じ家紋であることをご教授いただいた。三宅家の三宅藤兵衛も寺澤家の重臣であり、天草富岡城代となった人物である。

1 航空写真　市役所から西を望む

2 航空写真　市役所から北を望む

1 調査区全景（調査前）
2 1 区遺構検出状況（南東から）
3 1 区全景（西から）
4 1 区西半（北から）
5 1 区北東隅近景①(北から)
6 1 区北東隅近景②(南から)
7 SE004 完掘状況（北から）
8 SE005 遺物出土状況（南から）

1 SK002 半裁（南から）
2 SK003 遺物出土状況（北から）
3 SK007 遺物出土状況（北から）
4 SX008 遺物出土状況（南から）
5 カク乱 8 半裁（南から）
6 カク乱 1 南壁土層（北から）
7 サブトレンチ 2 全景（北東から）
8 2 区上層遺構全景（北東から）

1 2 区下層全景①(東から)
2 2 区下層全景②(南東から)
3 礎石トレンチ 3①(西から)
4 礎石トレンチ 3②(西から)
5 SK012 遺物出土状況（北から）
6 カク乱 9 検出状況（北から）
7 2 区調査区東壁土層（西から）
8 2 区調査区南壁土層（北西から）

1 SD014・SX015 近景①(北から)
2 SD014・SX015 近景②(南から)

1 SX013 付近西壁土層（東から）
2 SD014 石列検出状況（南東から）
3 SD014 完掘状況（北から）
4 SD014 近景①(南東から)
5 SD014 近景②(西から)
6 SD014 近景③(北から)
7 SX015 土層（北東から）
8 3 区検出状況（南から）

1 遺物（1 ～ 14）
2 遺物（15 ～ 20）
3 遺物（21）
4 遺物（22、24）
5 遺物（23）
6 遺物（25 ～ 27）
7 遺物（28）
8 遺物（29）
9 遺物（30）

1 遺物（32）
2 遺物（33）
3 遺物（36、37、39）
4 遺物（38）
5 遺物（40 ～ 42）
6 遺物（42）
7 遺物（43 ～ 48）
8 遺物（49 ～ 56）
9 遺物（57 ～ 65）

1 遺物（66 ～ 70）
2 遺物（71）
3 遺物（72 ～ 79）
4 遺物（80 ～ 93）
5 遺物（94 ～ 100）
6 遺物（101 ～ 105、108）
7 遺物（106、107）
8 遺物（109）
9 遺物（110 ～ 114）

1 遺物（121）
2 遺物（130）
3 遺物（131、132）
4 遺物（139①）
5 遺物（139②）
6 遺物（139③）
7 遺物（139④）
8 遺物（139⑤）
9 遺物（140）

1 遺物（141、142）
2 遺物（143）
3 遺物（144 ～ 156）
4 遺物（176、177）
5 遺物（178 ～ 181）
6 遺物（144）
7 遺物（182 ～ 185）

1 遺物（122、123）
2 遺物（124 ～ 126）
3 遺物（128）
4 遺物（129）
5 遺物（144 ～ 147）
6 遺物（148 ～ 156）
7 遺物（157 ～ 163）
8 遺物（164 ～ 175）

報　告　書　抄　録

ふりがな	からつじょうあと（11）
書名	唐津城跡（11）
副書名	唐津市役所建替えに伴う発掘調査
巻次	
シリーズ名	唐津市文化財調査報告書
シリーズ番号	第187集
編著者名	美浦　雄二
編集機関	唐津市教育委員会
所在地	佐賀県唐津市南城内１番１号　大手口センタービル６階
発行年月日	令和３年３月31日

ふりがな 所蔵遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
からつじょうあと 唐津城跡	さがけん 佐賀県 からつし 唐津市 にししじょうない 西城内 １－１	412023	0724	33°27′00″	129°58′05″	201905 ～ 201907	800㎡	唐津市役所新庁舎建設

所蔵遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
唐津城跡	城館跡	近世 ～ 現代	溝 土坑 道路 建物礎石	土師器 陶器 磁器 瓦 金属製品等	近世の遺構としては硬化した路面と側溝からなる道路跡を確認した。また近代以降の遺構としては「旧唐津小学校」の建物礎石を確認したことが特出される。

発掘現場から

文化力

POWER OF CULTURE

唐津市文化財調査報告書　第187集

唐　津　城　跡（11）

令和３年３月30日印刷
令和３年３月31日発行

編集・発行者　唐津市教育委員会
唐津市南城内１－１

印　刷　所　呼川プリント
〒847-0853　唐津市江川町７０２
☎(0955)７２－６０２３